

北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析 —宗像神信仰の研究(2)—

静岡理工科大学 名誉教授

矢田 浩

概要 主として神社庁公表の全国神社データに基づき北部九州における旧郡毎の宗像神および関連神を祭る神社の祭神分布を調べた。宗像神は宗像郡から豊前・豊後に到る東部地域と、松浦半島から有明海に到る西部地域とに高密度で祭られている。両地域の間には玉依姫と埴安神を祭る神社が集中するベルト地帯があり、宗像神およびその東部分布域に高密度で祭られる水神 おかみ 龍神のベルト地帯とは統計学的に有意な棲み分け関係にある。これら分布域の起源は、弥生時代に遡ると推定された。九州北方海域の宗像神分布から、朝鮮半島から日本列島に到る古代通商路として、沖ノ島を経由するムナカタルート1と、壱岐を経由するムナカタルート2（佐賀県經由有明海方面と西海方面へも分岐）が推測される。三女神のうち市杵島神は、特に高密度で祭られている遠賀郡域にルーツがあるように見える。このことから地名ムナカタの語源についての新説を提出した。他の二女神のルーツについても予備的考察を行った。

1. はじめに

平成27年(2015)文化庁文化財特別審議会で、「『むなカタ神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」が平成29年(2017)世界文化遺産登録を目指す候補として選定された。ムナカタ（旧宗像郡域）に、多くの人の関心が集まりつつある。

古代の宗像と沖ノ島には、多くの謎がある。多くの人々の関心にもかかわらず、その解明はなかなか進展しない。文献史料のほとんどない古代の歴史は、考古学知見からだけでは解明が難しい。

宗像の謎の核心は、宗像大社とその祭る神にある。しかし宗像大社の歴史だけからは、神話の世界の実像が見えてこない。神話を含む史料と遺跡・遺物とのギャップを埋めるために、宗像神および関連神を



祭る神社の祭神分布の解析を行っている。日本古代の神信仰は長い時の間に多くの変遷を経てきたが、人々は原則として一度祭った神を捨て去ることをしなかった。このため、その神の名を持つ神社がなくなっても、あるいはそれを祭っていた人々がいなくなっても、一度祭られた神の名は、多くの場合他の神社に合祀されるなどして残っている。このため祭神の解析から、古代以前の神々の分布とそれを祭った人々の動静を探ることが可能になる。

前報[1]では、主として最近の神社本庁のデータを用い宗像神の全国分布を検討した。宗像神（宗像大社たごりひめのかみ たぎつひめのかみ いちきしまひめのかみの三女神）には非常に多くの表記があるので、以下各神をそれぞれタゴリ・タギツ・イチキシマで代表させる。宗像神を祭る神社は沖縄県を除く全国で、3500社以上の神社本殿に祭られている。そのうち本来の宗像神信仰ではない八王子信仰社^(注1)を除外した約2900社について都道府県別の分布を検討した。宗像神がその誕生神話のように三神セットで祭られている場合は、全体の28%に過ぎない。最も多いのはイチキシマー神を祭る神社で、全体の60%を占める。その比率は関東・東海・近畿に多い。多くの神社が宗像神を祭るにもかかわらず、ムナカタ（ムナガタ）の名を持つ神社は69社と少ない。その表記には、宗像以外に胸肩、胸形、宗形、宗方などの古名を持つ社が宗像から遠方に多い。しかし宗像神のみを主祭神とする「純ムナカタ系社」は、950社以上現存する。

この集計で宗像神が特に集中して祭られていることのわかった青森県津軽地方、栃木県、千葉県印旛沼周辺、中国地方山間部について歴史史料や考古学的知見などと対比して考察した結果、宗像神の全国への普及は古代以前に遡ると推定され、特に弥生文化の日本海に沿っての北上と、それに続く内陸から表日本への波及に対応するケースが多いと見られた。弥生時代後半以降古代に入っても、古くからの繋がりがあったと見られる出雲系や物部系の人々の移住を先導するようにして、特定の地域に宗像神が集中的に祭られている。このことは、古代以前の宗像海人族が単に通商に従事していたばかりではなく、人口の少ない農業適地への移住者に対する情報提供や先導など、今日の総合商社的な役割を担っていたことを示唆する。しかしそのような広域活動は、ヤマト王権がほぼ全国を掌握すると制約を受けざるを得なかったと思われる。沖ノ島祭祀の開始は、その時期に対応していると推定された。

宗像神信仰の起源と考えられる福岡県では、宗像神を祭る神社の存在比は全国の平均レベル程度であった。これは福岡県が地勢的・歴史的に広域にまたがり、その中で宗像神信仰が他神信仰と棲み分けしているためと思われる。そこで本報では北部九州諸県について旧郡単位で分布を調査し、不均一な分布の一因と思われる他神信仰との関係についても調べた。

なお前報と同様、本報でも宗像市と福津市を含む旧宗像郡域を、地域名としてムナカタと呼ぶことにする。ただし宗像大社が祭る三女神は宗像神とし、宗像神を祭る海人族を宗像海人族と呼ぶことにする。



2. 基礎資料と解析方法

前報と同様神社本庁調査の『平成「祭」データ』（以下『平成データ』と表記）の WINDOWS 版[2]を基礎資料とし、同ソフトの旧郡データを活用して旧郡ごとに本殿に宗像神を祭る神社の数を調査集計した。北部九州の範囲としては、福岡・佐賀・長崎の諸県に加えて、歴史的に宗像と関係が深い豊前地方を含む大分県をも加えた。この4県の旧郡名と、その範囲の変遷を表1に示す。『平成データ』の郡名は旧国郡制のものであり、松浦郡・彼杵郡・高来郡・国東郡・海部郡のような広域の郡があるのでそのままでは地域間の比較に適当でない。これらの郡は明治11年(1878)の郡区町村編制法で分割されたので、ここでは基本的にこの郡制に従って解析を行った。その各郡の位置を、図1に示す（郡境の位置は石田諭司のホームページ[3]を参考にした）。ただしこのとき新設された山本郡は国郡時代にはなく、『平成データ』では御原・御井の両郡に分かれて含まれているので、これら三郡は一括して表示した。またそのほかにも範囲が小さく相互比較に適当ではない郡があるので、各郡の全神社数が50以下の郡は原則として地勢的に繋がる隣接の郡と一括して表示・検討することにした。宗像神と他の各神との関係を探るために、主な他神についても旧郡毎にそれを祭る神社の社数を調査集計した。

前報と同様、昭和19年宗像神社発行の『宗像三神奉斎神社調』（以下『調』）[4]も必要によって参照した。このデータには不正確なところがあるが、『平成データ』に記載されていない社や、境内摂・末社を含んでいる点で有用である（前報参照）。

多くの旧郡には主として第二次大戦戦前に編纂された郡誌が存在し、戦後の地方誌にはない神社の記録が残っている。なかでも宗像・遠賀両郡の記録[5][6]は詳細であり、これらを用いて『平成データ』の不備を補った。

さらに前報に述べた明治期以降の神社変遷の影響を見るため、江戸期の資料をも参照した。筑前国には地誌が整備されており、なかでも寛政五年（1773）福岡藩主に上進された『筑前国続風土記付録』（以下『付録』）[7]には基本的に福岡藩内の全神社が収録されていて、その多くには祭神も記されている。これも必要により参照した。



北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析
 —宗像神信仰の研究（２）—

表 1 明治期の国郡制と各旧郡の神社数

旧国	明治11年(1878)~22年(1889)				明治29年 (1896)	全神社数	本報での 区分
	県	郡	図1	備考			
対馬(131)	長崎県(1278)	上県				49	
		下県				82	
壱岐(150)		壱岐				81	
		石田				69	
肥前(2089)		北松浦		旧国では 松浦郡		244	
		南松浦				153	
		西彼杵		旧国では 彼杵郡		176	
		東彼杵				79	
		北高来		旧国では 高来郡		84	
		南高来				160	
	西松浦		旧国では 松浦郡		100		
	東松浦				223		
	小城				168		
	佐賀		旧佐嘉郡		138		
	神崎				108		
	三根	a		三養基郡	28	101	
	養父	b			41		
	基肄	c			32		
	杵島				120		
藤津				134			
筑前(1420)	福岡県(3364)	志摩			糸島郡	55	
		怡土				79	
		早良				98	
		那珂		一部が 福岡区に	筑紫郡	102	114
		席田	d			12	
		御笠			59		
		夜須			朝倉郡	77	120
		上座		76			
		下座	f	44			
		糟屋				105	
		宗像				148	
		遠賀				174	
		鞍手				220	
		穂波			嘉穂郡	93	
		嘉麻				78	
筑後(1336)		御原	e		三井郡(十 久留米市)	(42)	163
		御井	g			(121)	
		山本	h			-	
		竹野	i		浮羽郡と 八女郡に	93	
		生葉				118	
		上妻				267	
		下妻	j			53	
		三潯				233	
		山門				259	
		三池				150	
豊前(999)		田川				182	
		企救				126	
		京都			京都郡	94	108
		仲津				99	
		築城			築上郡	47	
		上毛				61	
		下毛				173	
宇佐					217		
豊後(1741)	大分県(2140)	西国東		旧国では 国東郡		110	
		東国東				192	
		速見				221	
		日田				96	
		玖珠				79	
		大分				261	
		直入				126	
		大野				279	
		北海部		旧国では 海部郡		148	
		南海部				229	

(カッコ内は社数合計)

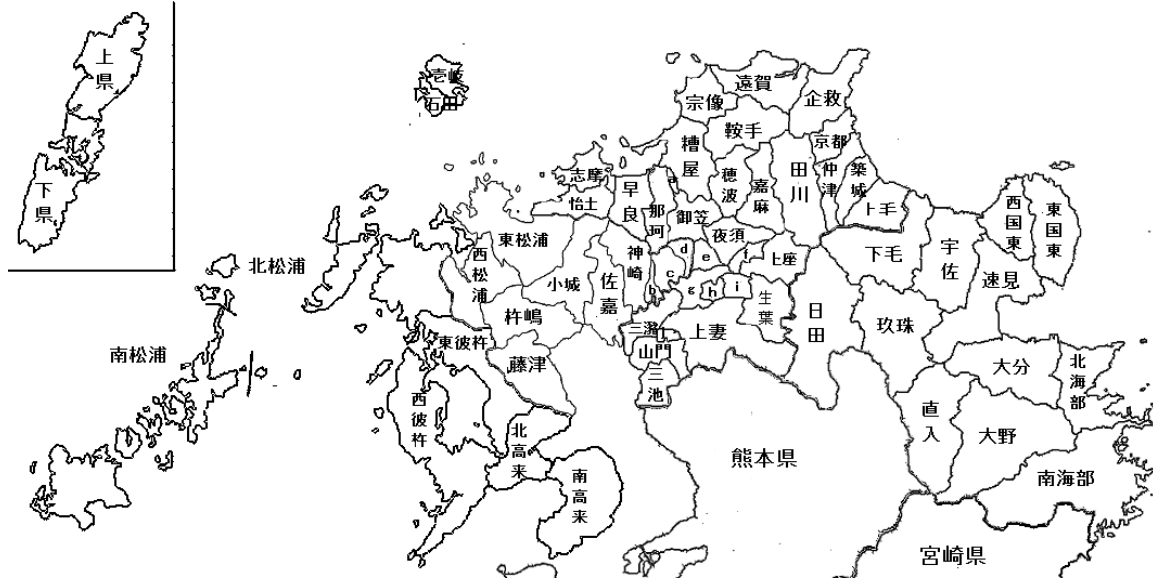


図1 九州北部4県の旧郡の位置(a-h は表1参照)

3. 神名の集積について

前報で述べたように、『平成データ』では祭神は各社からの申告のまま記載されているので、神名の表記は多種多様である。このことは、古くから祭られてきた神で特に著しい。宗像神はその典型例であり、あらゆる表記を完全に網羅することはかなり難しい。前報に掲載した宗像神の表記一覧についても、その後新しい表記を発見したので、表2に補足して再掲した。その他再検討を行った結果、全国で本殿に宗像神を祭る全神社は3535社、八王子神を除外すると2928社となった。前報で指摘したように、この手法では後に意外な表記が発見されることがあるので、この値は下限値である。しかし前報で述べたように、過去の調査との比較から見てそれほど多くの遺漏はないと考えられる。

宗像神との比較を行うため他神についても集積を行ったが、神名が多種多様に亘る神ではかなり困難な場合がある。社名から祭神の存在が推定できる八幡系神社などでは多様な表記を発見しやすいが、一般には完全な集積はかなり難しい。したがって本報で示す各祭神の社数は、今後多少増加の可能性はある。

その他の郡、特に筑前南部と筑後の諸郡にはきわめて少なく、県内で分布が偏っている。一方、佐賀県の東西松浦・杵島郡や、大分県の宇佐・大野郡など、宗像郡と同程度またはそれ以上に宗像神が祭られている郡がある。

Location	Main Shrine (本殿)	Branch Shrine (末社)	Total
対馬	1	0	1
壱岐	3	2	5
北松浦	3	2	5
南松浦	7	0	7
西彼杵	1	3	4
東彼杵	1	0	1
北高来	8	0	8
南高来	13	0	13
西松浦	13	0	13
東松浦	5	1	6
小佐賀	5	1	6
神埼	6	3	9
三基	17	1	18
藤津	3	0	3
系島	9	4	13
糸島	4	3	7
早良	4	6	10
筑紫	4	5	9
朝倉	1	1	2
糟屋	8	3	11
宗像	20	20	40
遠賀	6	4	10
鞍手	5	4	9
嘉穂	2	2	4
生井	5	2	7
三井	10	2	12
八幡	1	0	1
山門	4	4	8
三田池	0	2	2
企救	13	1	14
京都市上毛	3	2	5
築下	4	6	10
宇佐	11	9	20
西国	4	6	10
東国	11	7	18
速見	8	6	14
日田	0	1	1
玖波	9	7	16
大分	12	1	13
直野	24	4	28
北海	4	1	5
南海	5	0	5

表 1 に見るように各郡の全社数にはかなりバラツキがあるので、宗像神を祭る神社の各郡全社数に対する比の分布を示したのが図 4 である。これによると西松浦と杵島郡は宗像・遠賀両郡よりさらに比率が高い。遠賀郡に隣接する企救郡も、この両郡と並ぶ高い比率を示している。

そして筑前中央部の比較的宗像神の希薄な地域を挟んで、佐賀県東部にこれに劣らない宗像神集中域がある。

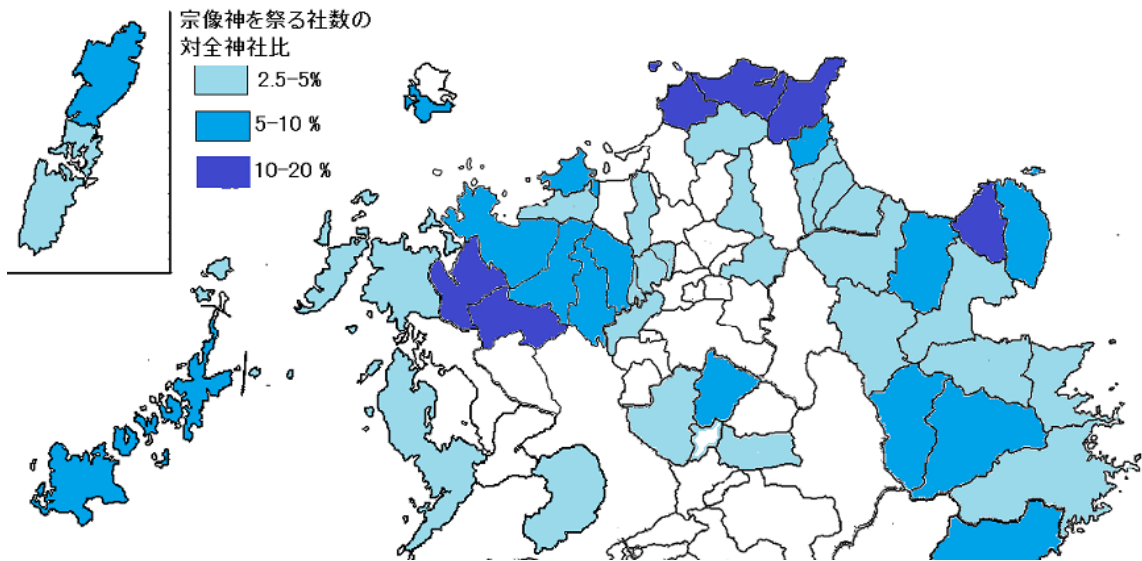


図5 宗像神を祭る神社の全社数に対する比の北部九州における分布

4.2 北部九州で多く祭られる神々

上記のような宗像神の偏った分布は、他神との棲み分けの存在を推測させる。

宗像神の他神との関係を、以下に統計学的手法で検討してみよう。それに先立ち、表3に北部九州四県で祭られる代表的祭神を挙げ、それらを祭る神社の北部九州および全国の総数を示す。これら祭神は、三女神以外は北部九州で総社数の5%以上に当たる150社以上が祭られている。参考までに宗像郡の値も示す。

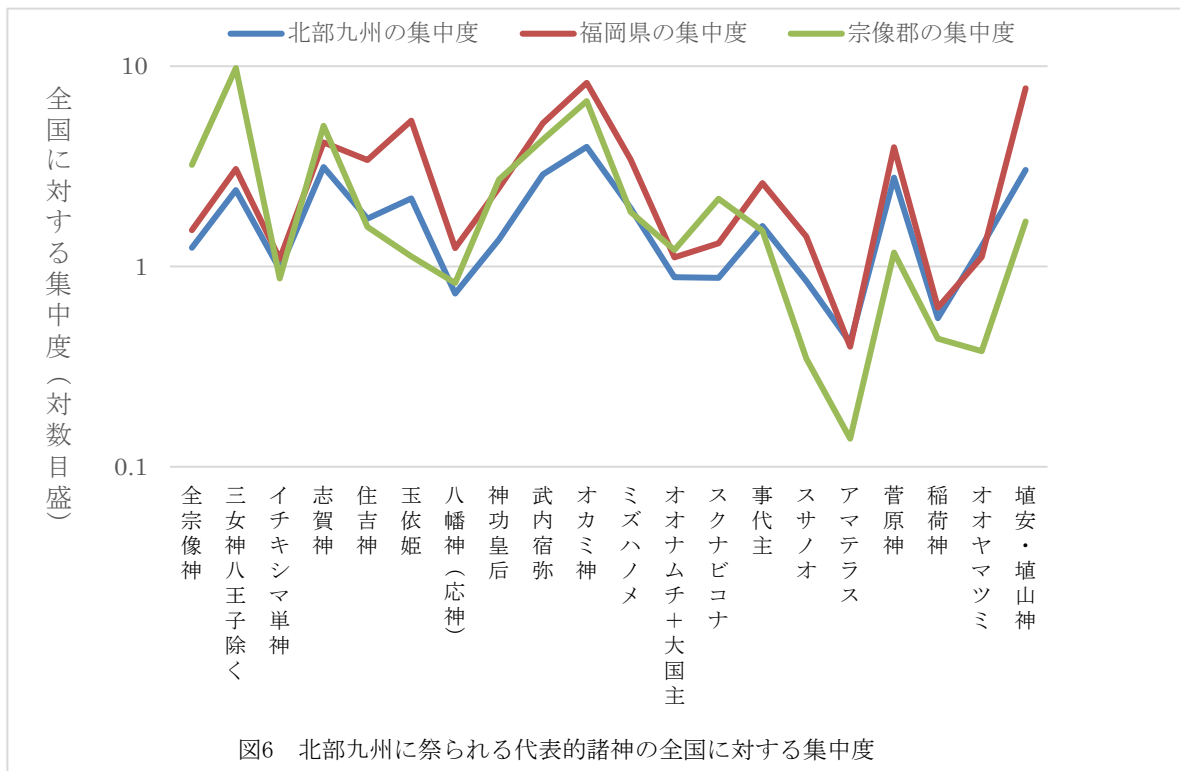
これを見ると、北部九州では全国と大きく異なる分布を示す神々がかなり多いことが分かる。その様子をわかりやすく示すため、各神の分布の全国平均との比を、全国平均に対する集中度として同表中に示した。この集中度を、図6に対数目盛で示した。



北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析
— 宗像神信仰の研究（2） —

表3 宗像神および北部九州で祭られる他の代表的神々を祭る神

神名	表記例	全国		北部九州			福岡県			宗像郡		
		神社数	対全神 社比(%)	神社数	対全神 社比(%)	対全国 集中度	神社数	対全神 社比(%)	対全国 集中度	神社数	対全神 社比(%)	対全国 集中度
全宗像神		2928	3.7	347	4.7	1.3	123	5.8	1.6	17	11.5	3.1
三女神八王子 除く		814	1.0	150	2.0	2.0	56	2.6	2.6	11	7.4	7.2
イチキシマ単 神		1755	2.2	164	2.2	1.0	53	2.5	1.1	3	2.0	0.9
志賀神	綿津見・少童・豊玉姫	1375	1.7	406	5.5	3.1	154	7.3	4.2	13	8.8	5.0
住吉神	表筒男・中筒男・底筒男	1694	2.1	277	3.7	1.7	155	7.3	3.4	5	3.4	1.6
玉依姫	玉依姫	951	1.2	196	2.6	2.2	137	6.5	5.4	2	1.4	1.1
八幡神(応神)	応神天皇・菅田別・大瀬和 氣	13564	17.2	937	12.6	0.7	451	21.2	1.2	21	14.2	0.8
神功皇后	神功皇后・息長足姫・大帯 姫	3934	5.0	506	6.8	1.4	261	12.3	2.5	20	13.5	2.7
武内宿弥	武内宿弥・建内宿禰	745	0.9	202	2.7	2.9	104	4.9	5.2	6	4.1	4.3
オカミ神	霧・淤加美・丘見	1355	1.7	505	6.8	4.0	301	14.2	8.3	17	11.5	6.7
ミズハノメ	罔象・水波女	1994	2.5	368	4.9	2.0	184	8.7	3.4	7	4.7	1.9
オオナムチ+ 大国主	大己貴・大国主	6183	7.8	515	6.9	0.9	185	8.7	1.1	14	9.5	1.2
大物主	大物主	1778	2.3	199	2.7	1.2	46	2.2	1.0	1	0.7	0.3
スクナビコナ	少彦名・少名彦・少名毘古 那	2446	3.1	202	2.7	0.9	86	4.0	1.3	10	6.8	2.2
事代主	事代主	2121	2.7	318	4.3	1.6	149	7.0	2.6	6	4.1	1.5
スサノオ	素戔鳴・須佐之男	9211	11.7	735	9.9	0.8	349	16.4	1.4	6	4.1	0.3
アマテラス	天照大神・天照皇大神・大 日靈貴	11586	14.7	455	6.1	0.4	124	5.8	0.4	3	2.0	0.1
菅原神	菅原(道真)・天満天神	7721	9.8	2018	27.1	2.8	817	38.5	3.9	17	11.5	1.2
稲荷神	倉稲魂・宇迦之御魂	7336	9.3	381	5.1	0.6	123	5.8	0.6	6	4.1	0.4
オオヤマツミ	大山祇・大山津見	7066	8.9	841	11.3	1.3	212	10.0	1.1	5	3.4	0.4
埴安神	埴安姫・埴安彦・埴山姫	637	0.8	182	2.4	3.0	133	6.3	7.8	2	1.4	1.7
全神社数		78960		7439			2124			148		





宗像神では、イチキシマが北部九州・福岡県・宗像のいずれでも全国平均程度の分布を示すのに対し、三女神の集中度はこの順で増加する。このため全宗像神もこの順で集中度が高まる。

続く三神は、北部九州で宗像神と並んで海神として祭られることの多い神々である。玉依姫は、志賀神とともに祭られることも多いが、京都市下鴨神社の主祭神として全国に加茂系神社にも祭られ、また神武天皇の母として祭られることもある。このために志賀神とは独立に示した。いずれの海神も北部九州で多く祭られるが、特に福岡県で集中度が高く、その中でも玉依姫の集中度が高い。そのなかで宗像郡では、志賀神の集中度は三女神について高いが、玉依姫の集中度は低い。

続く三神は八幡系神社で主に祭られる神々で、主神の応神天皇は全国平均と同程度の分布であるのに対し、神功皇后じんぐうと武内宿弥たけしうちのすくねは北部九州、特に福岡県に強い分布を示す。

次の二神は、記紀神話で宗像神より先に登場する由緒の古い水神である。オカミ神（『書紀』に高竈たかおかみ・闇竈くらおかみ）とミズハノメ（『書紀』に罔象女）は、北部九州に集中して分布し、特にオカミ神は宗像郡を含む福岡県に強く集中する（『日本書紀』を以下『書紀』と略称、読みは岩波文庫版[8]を用いる）。オカミ神は、重要な神であることがこの後判明するので、注記で解説する（注3）。

続く三神は一般に出雲系として知られる神々である。出雲の主神オオナムチ（『書紀』に大己貴神おおあなむちのかみ、大國主命おおくにぬしのみことと同神とされる）の集中度は高くないが、他の二神は福岡県に多く、特にスクナビコナすくナビコナ（『書紀』に少彦名命すくなひこなのみこと）が宗像郡に多い。

スサノオからオオヤマツミまでは、全国的に広く祭られている古代後半以降の流行神である。スサノオすさのおのみこと（『書紀』に素盞鳴尊）は、記紀神話では出雲の重要神であるが、『出雲国風土記』では重要神の扱いはされていない。現在は後年盛んになった熊野信仰の神として祭られるケースが多い。宗像郡に少ないのはこのためであろう。全国的にポピュラーなアマテラスあまてらすおおみかみ（『書紀』では天照大神）は、北部九州に少なく、特に宗像郡には殆ど祭られていない。これは、天皇家の祖神アマテラスは古代に一般に祭られることがなかったためと思われる。神祇世界の成立が古かった北部九州では、中世以降の伊勢信仰の影響が入りにくかったのであろう。菅原神はその由緒から北部九州に多いが、その中で宗像郡は平均的である。稲荷神うかのみたま（『書紀』に倉稻魂）を祭る社数は、全国での普及度よりかなり低い。オオヤマツミ（『書紀』に大山祇）は、宗像郡に少ないことが特徴的である。これらの特徴は、宗像郡の神祇世界が殆ど古代のうちに成立していたために、中世以降の流行神が入る余地がほとんどなかったことを示すと思われる。

『書紀』に出る土の神埴安神はにやす（埴安姫が殆どであるが、男神の埴安彦もある）と埴山神（北部九州では少なく、すべて埴山姫）は一般に同神とされ、実際相互に殆ど区別なく祭られていることが多いので、



両神を合計して扱う。この神は、北部九州、中でも福岡県の集中度が高い。宗像郡ではそれほど集中度が高くないので、それ以外の地域に集中していることが推定される。

4. 3 相関係数による他神との関係の検討

上記の各神と宗像神との相関を以下に検討する。このような複数のデータ群の関係を統計学的に示すのが、相関係数 (r) である。これは、二組の変数（ここでは各郡でのそれぞれの祭神を祭る神社の数）の全体の平均値との差を各郡ごとに掛け合わせ、その総和を両者の標準偏差の積で割った値である。数式で書けば、

$$r = \frac{\sum (x_k - m)(y_k - n)}{\sqrt{\sum (x_k - m)^2} \sqrt{\sum (y_k - n)^2}}$$

(ただし m は x_k の平均値、 n は y_k の平均値)

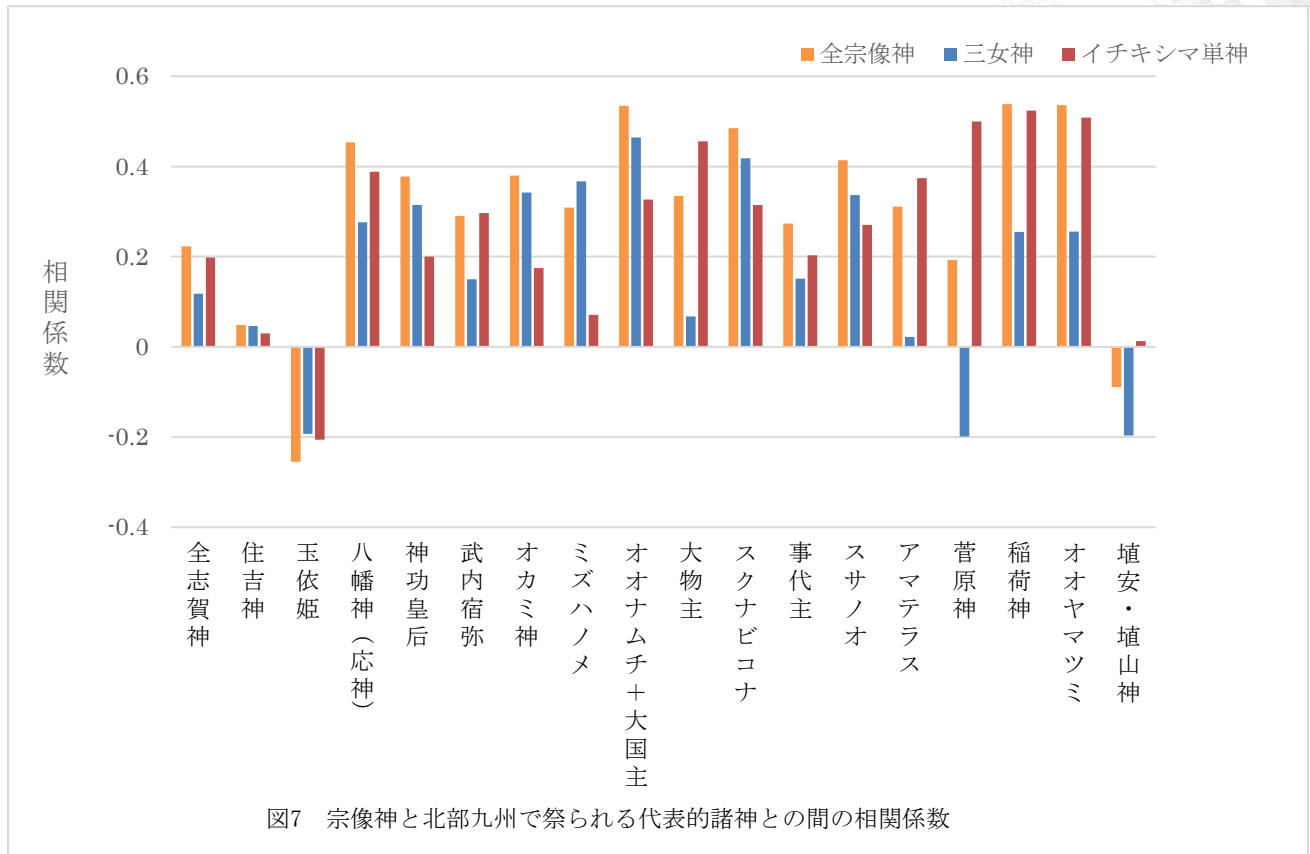
となる ($x \cdot y$ が変数)。

変数同士が正比例の関係になれば値は 1 となり、反比例の関係になれば -1 となる。一般に、相関係数が $\pm 0.2 \sim \pm 0.4$ であれば弱い相関が、 $\pm 0.4 \sim \pm 0.7$ であれば中程度の相関が、 ± 0.7 以上 (以下) であれば強い相関があるとされている (+ は正の相関、- は負の相関)。データの数が多くなるほど、信頼性が高くなる。この検討では 57 のデータ (郡) があるので、 r が 0.22 以上であれば、正の相関関係があるという結論が誤っている確率は 10% 以下である。 r が 0.31 以上であればこの確率は 2% 以下で、かなり確実に正の相関があると言える (滋賀大学中川雅央の HP [9] による)。

負の相関については、神社数がマイナスの値になることはないので、 r が大きな負の値にはなりにくい。実際、一方の神社数が 0 または非常に少ないことが多く、その場合には相関係数算出で仮定されている直線近似とはほど遠くなる。したがって反目する神同士の有意な r の値の基準をどのあたりにしてよいかはよくわからないが、得られた相関係数を見る限り -0.15 あたりを基準にするのが適当と思われる。

図 7 に、宗像神と北部九州で祭られる他の代表的祭神との間の相関係数を図示した。宗像神は総社数の他に、社数の多い三女神を祭る神社とイチキシマのみを祭る神社とについても算出した。

同図で見ると、宗像神は二・三の神々を除き多くの他神とかなり強い正の相関を持つ傾向が認められる。また一般に全宗像神が三女神およびイチキシマ単神よりも大きい値を示す。これはイチキシマを祭っていた神社の一部が後に三女神化したと考えれば、理解できる。古い出雲神であるオオナムチ (+ 大國主) およびスクナビコナとの相関係数が大きく、前報で指摘した宗像と出雲との係わりに対応していると思われる。

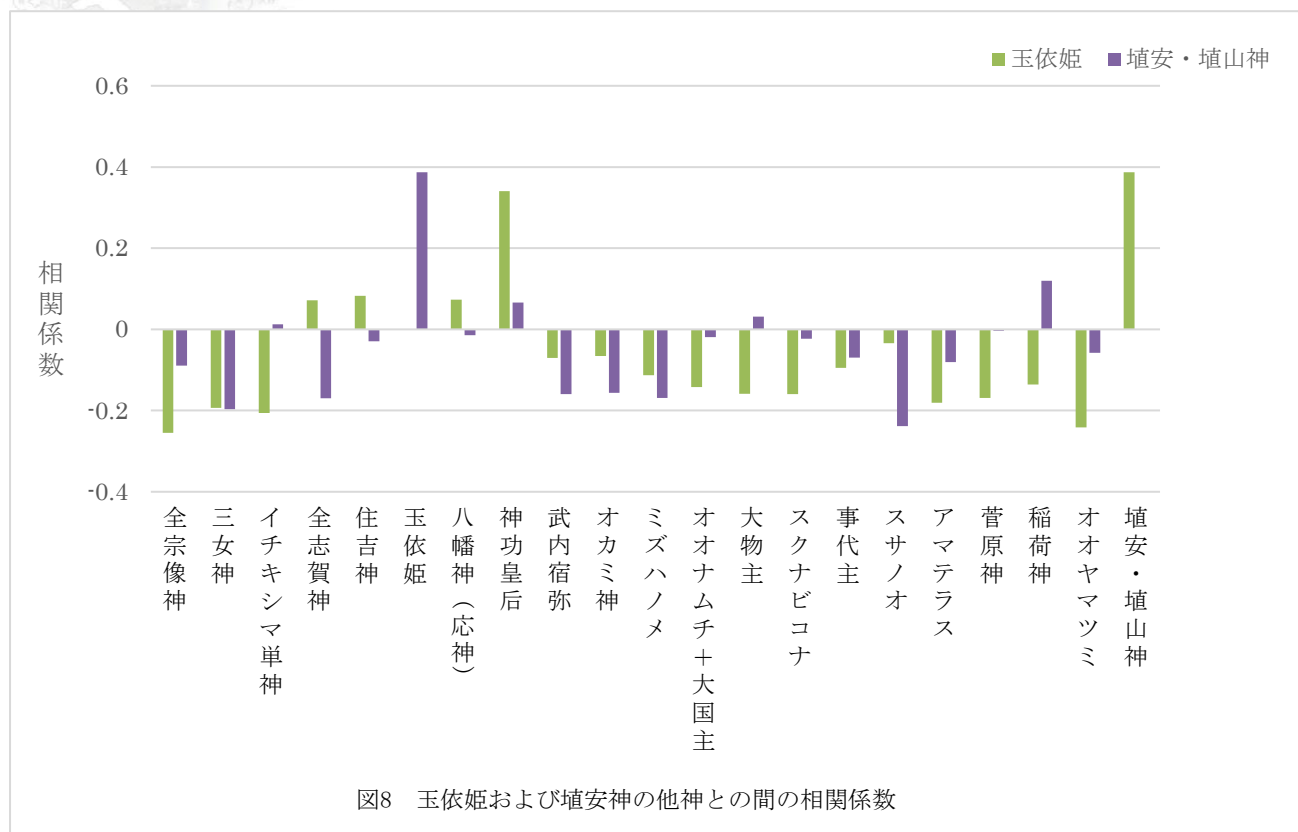


海神同士では、志賀神とは正の相関がある程度見られるが、住吉神とははっきりしない。そして玉依姫とは、明確な負の相関を示す。北部九州では玉依姫が志賀神の範疇で祭られることが少なく、主に他の信仰分野で祭られていると推定できる。

玉依姫と同様宗像神と負の相関を示すのは埴安神で、特に三女神と明確な負の値を示す。菅原神も同様であるが、イチキシマが明確な正の相関を示すので、全宗像神とは正の相関に止まっている。

以上から、宗像神は多くの神とおおむね良好な共存関係にあるが、玉依姫と埴安神とは棲み分けの関係にあることが明らかになった。このような関係は、この両神と宗像神との間のみで見られるのであろうか。

図 8 に、玉依姫および埴安神とその他の神々との相関係数を示す。図 7 と対蹠的に、この両神は他の多くの神々と相互に反発する関係にあることが見て取れる。そして当然予想されるように、この二神間は例外的にはっきりした正の相関を示す。すなわちこの二神は共同で、他神が入りにくい独自の信仰圏を持っていたのである。もう一つのはっきりした例外は、玉依姫と神功皇后との間の正の相関である。これについては後に検討する。



4. 4 信仰圏の対立

1) 宗像神と玉依姫との棲み分け

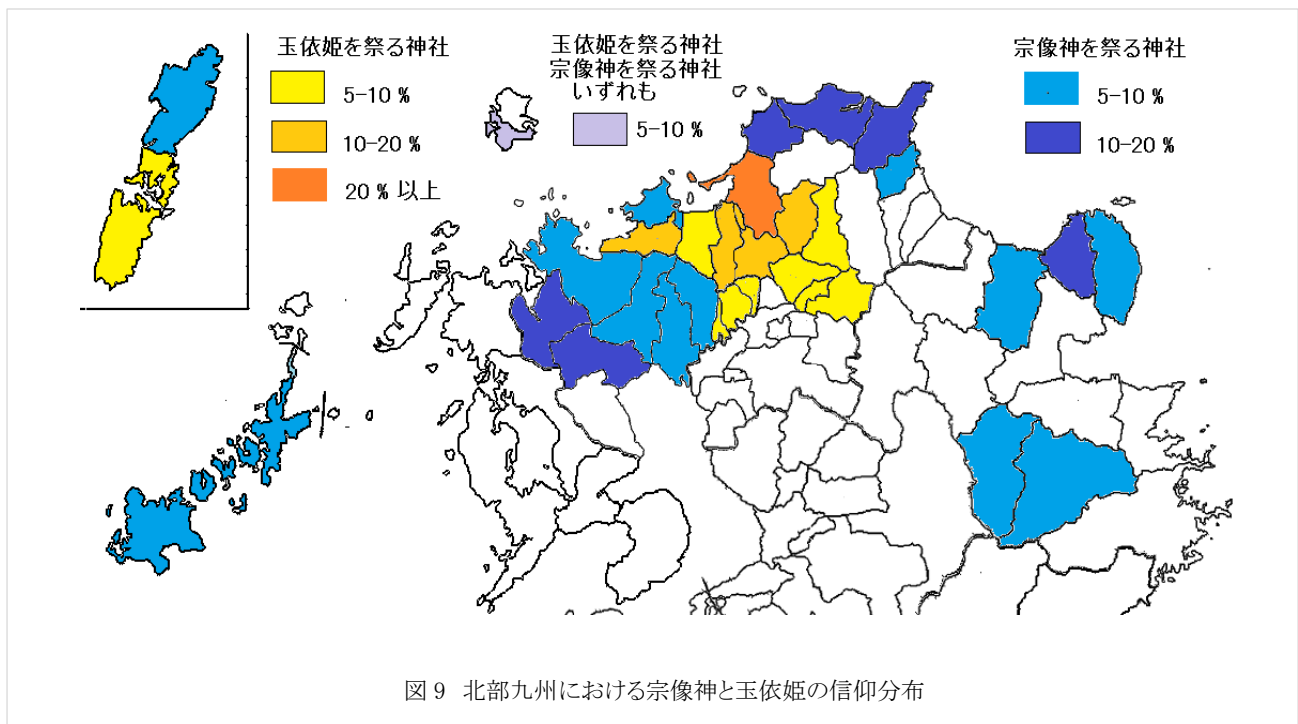
上記の各神間の関係を、地図上で確かめてみよう。図5で示した宗像神信仰圏に対し、同じ海神の伝承を持つ玉依姫はどのように棲み分けていたのだろうか。図9に玉依姫の北部九州での分布を、宗像神と重ねて示した（宗像神は図5の2.5-5%の領域を表示していない）。この両神の顕著な分布域は殆ど重ならず、はっきり対立した信仰域を示している。唯一の例外が壱岐島の石田郡であるが、詳細に見ると宗像神がその西部郷ノ浦地域に分布するのに対し、玉依姫は東部の原の辻遺跡周辺に分布する。興味深いのは、対馬での棲み分けである。宗像神は上県郡に多く特にその東岸に多く分布するのに対し、玉依姫を祭る神社はすべて下県郡にあり、中央部の浅茅湾沿いと、そこから西岸および東岸へ出た入江に多く分布する。浅茅湾内には弥生時代の遺跡が集中し、魏志倭人伝が記す対馬国の中心があったと考えられている。

玉依姫は、本土部では特に旧糟屋郡に集中する。多くが志賀系海神を代表する豊玉姫や少童神とともに祭られており、本来海人族が祭った神であることを示している。しかしその他の郡では、宝満山の竈門神社から広まった竈門神社や宝満神社に、多くは八幡神と神功皇后との組み合わせで祭られている（これ



が前述の玉依姫と神功皇后との間の正の相関となって現れている）。しかしその中に玉依姫一神を祭神とする社も多いので、宝満系神社は本来玉依姫信仰であって、八幡神と神功皇后は後に併祭された祭神と思われる。

筑前西部の中でも、志摩郡で宗像神が玉依姫に対して優勢なのは、宗像から壱岐や西海方面への航路の寄港地があったためであろう。

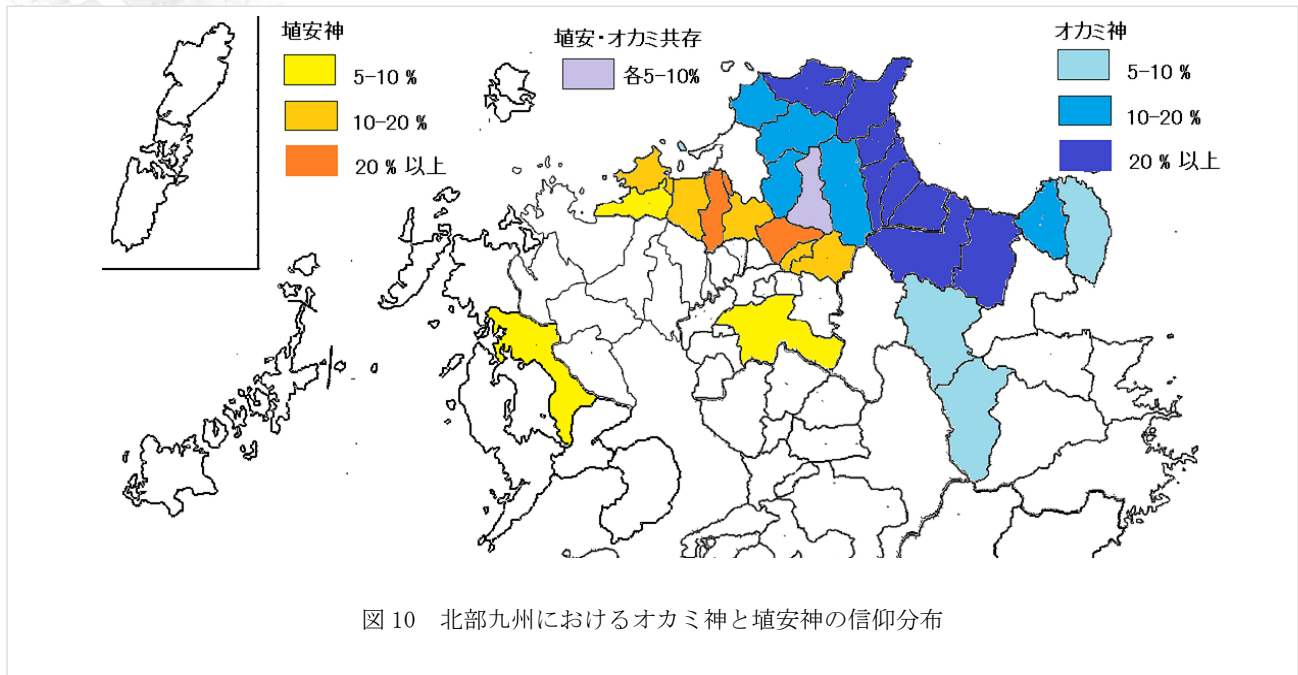


2) オカミベルトと埴安ベルトとの対峙

次にオカミ神と埴安神の分布を、図 10 に示す。図 9 と同様、この両神ははっきりした棲み分けの関係にあることが分かる。

オカミ神は、宗像郡から始まり、国東半島および直入郡に到る連続した「オカミベルト」を示している。特に遠賀郡から宇佐郡に到る地域の分布が濃厚で、豊前地方に信仰の中心があるように見える。

一方埴安神は、糸島半島から上座郡に到る連続した「埴安ベルト」を形成している。分布の中心は、那珂郡から夜須郡の辺りにあると見られる。このベルトは、オカミベルトと接していて、ほとんど重複しない。唯一の例外は、両社が 5%以上祭られる旧嘉麻郡である。



3) 江戸時代以前から存在した2つのベルト

このような神々の棲み分けは、筑前国内のみではあるが、江戸時代の『付録』にも示されている。『付録』にある石祠や杜（社殿のない社叢）を含む貴船系社数を集計し、『平成データ』による値と比較して図 11 に示した。『付録』には多くの場合祭神名が示されていないので、貴船の名がある社祠同士を比較し、『平成データ』のオカミ神数をも参考に示した。各郡で現在の貴船社の5ないし15倍、オカミ神の4から7倍と著しく大きいのが、相対的には同様の分布を示す。『付録』の社数が多いのは、社・祠の区別がはっきりしない村があるので、その合計を示したためである。

一方埴安神は、さまざまな名の神社に祭られ、しかも社名がしばしば変化しているため正確な比較は困難である。図 11 で貴船社・祠のほとんどない郡に、『付録』では天神社・地祿天神社・田神社などが多い。その多くには祭神の記載がないが、埴安神が記されている場合がある。そしてそれに対応する現存社が埴安神を祭る場合が多いので、その殆どが江戸時代に埴安神を祭っていたと思われる。たとえば「天神社」は他県ではほとんど菅原神を祭る神社であるが、福岡県では現在 57 社の天神社（地祿天神を含む）のうち 32 社が埴安神を祭り、菅原神は 8 社に過ぎない。ただし天神社のうちにはスクナビコナやミズハノメなど同様に起源の古い神を主神とする社も多く、「天神」とは上古以来の神の総称であったとも考えられる。いずれにせよ埴安ベルトでは、江戸時代以前から埴安神を多く祭ってきたことは確かと思われる。

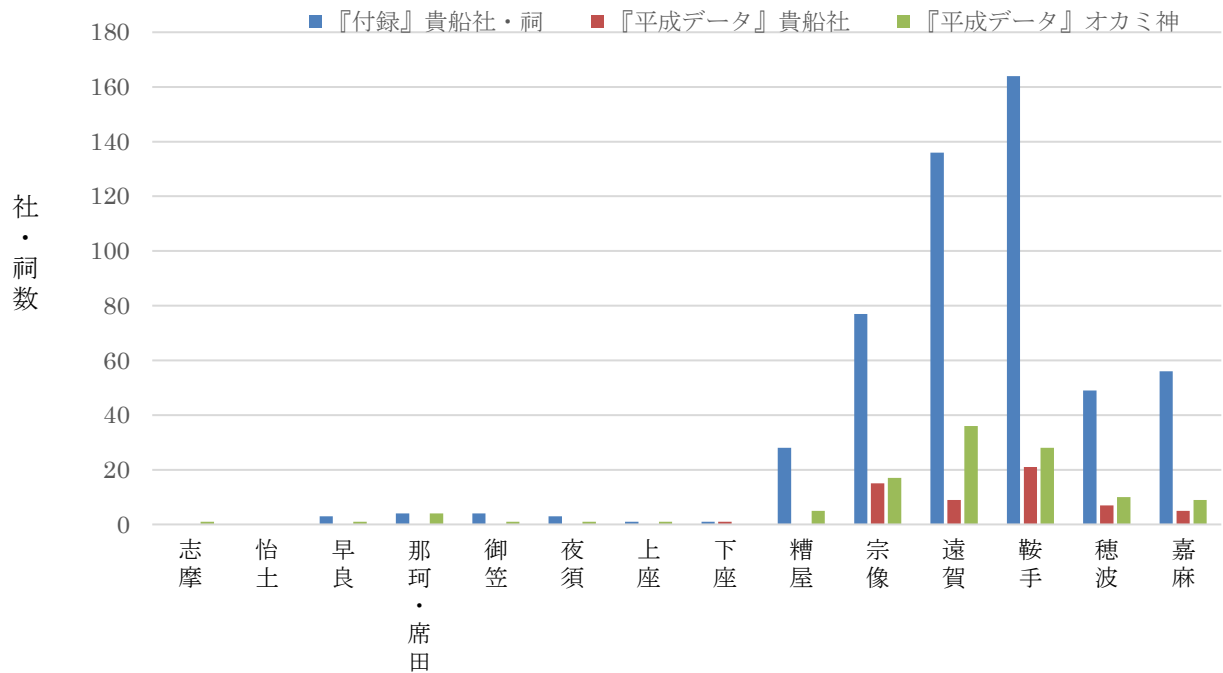


図11 筑前国の貴船社における『平成データ』と『付録』との比較

4) 埴安神の分布と弥生時代の甕棺文化圏

以上のような明確な信仰圏の対立は、文化圏の対立を示していると思われる。このような筑前西部とそれ以東の文化の対立としては、弥生時代の甕棺葬文化圏とそれ以東の地域との隔絶が想起される。

図 12 は、藤尾慎一郎による北部九州の弥生時代全期間の大型甕棺分布図である[10]。図 10 の埴安神の分布と比較すると、埴安神が佐賀県域と熊本県域に殆ど祭られていないことを除けば、両者の分布はよく一致している。二つのベルトの境界領域の嘉麻郡で埴安神とオカミ神が共存するのも、立岩遺跡とその周辺に甕棺文化が割り込んでいることと対応している。先述の玉依姫信仰がこの地域に進出していることも、これに対応する。

甕棺文化圏で埴安神が祭られていたのは、甕棺製作に当たって原料の土に特別の神威を感じ、土の神である埴安神を祭ったと考えれば理解できる。古代人が土器の原料である土に特別の呪術的意味を感じていたことは、神武東征伝説中の説話などに見ることができる。

かつて甕棺文化圏に属しない宗像以東は弥生文化の後進地と見なされていたが、田熊石畑遺跡の再発見[11]で甕棺文化圏に比肩する繁栄を誇っていたことが明らかになった。宗像から始まるオカミベルトは、この地域が甕棺文化圏と異なる精神文化の伝統を持っていたことを示している。



このように、弥生時代に起源を持つ精神文化の伝統が、祭神の継承を通じて、現代まで連綿と受け継がれてきたと考えられる。このことは、少なくとも北部九州においては、祭神分布とその解析が古代史を理解する上で重要な鍵になることを示したと言えよう。

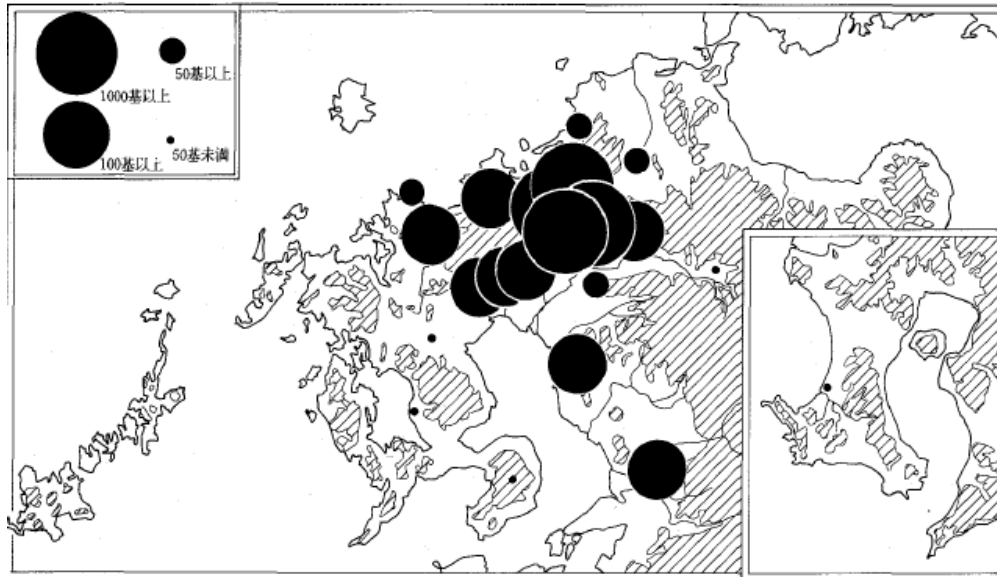


図 12 北部九州における弥生時代甕棺の出土分布（藤尾慎一郎による）



4. 5 「海北道中」と西海の宗像神

ここで航海神としての宗像神の分布を見てみよう。図 13 に島嶼部を含む北部九州沿岸のおもな宗像系神社を示した。



『書紀』の「海北道中」に対応して、対馬北部東岸に宗像神を祭る神社が多い。宗像を名乗る神社は大増の宗像神社だけであるが、この宗像神はより南の佐賀から勧請されたと言っている。佐賀の和多都美神社は、旧名を佐賀宗形宮と言ったという[12]。佐賀には有名な縄文貝塚があり、宗像海人族との繋がりが縄文以来である可能性を示す。なお大増の宗像神社（写真 1）を支えている神主や氏子の殆どが比田勝氏であるので、この神社もしくはその元社がかつて良港の比田勝にあった可能性が高い。実際に、比田勝港近くの倉庫で「宗像神社」の扁額を実見した。比田勝は「日高津」のことで、東に漕ぎ出す港の意味と考えられる。これらは沖ノ島経由で直接宗像やその他の響灘沿岸地方に向かう航路に対応すると考えられ（これをムナカタルート 1 とする）、まさに『書紀』の「海北道中」に位置する神社群である。



北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析
—宗像神信仰の研究（2）—



写真1 対馬市大増の宗像神社

一方対馬南部にも三女神を祭る2社があり、壱岐の西海岸に対している。前述のように壱岐には南部に宗像神が多いが、郷ノ浦港の湾口にある渡良三島^{わたらみしま}と呼ばれる大島、長島、原島^{はるしま}（写真2）に、それぞれ島の名を社名とし、宗像三神のみを祭る三社がある。



写真2 壱岐市郷ノ浦港外の渡良三島（岳ノ辻展望台から望む）

壱岐西南部にも、原の辻遺跡に近い石田町池田西触に宗像三神を祭る田嶋神社がある。この神社は、呼子の加部島にある式内の名神大社（前報参照）の田島神社（写真3）の系列社と見られる。ここからは、東行宗像へ向かうルートが考えられる（ムナカタルート2）。この経路にも、要所に宗像系神社がある。唐津湾口の姫島にイチキシマが祭られており、博多湾口唐泊崎に護られた宮浦港には三女神を祭る古社三所神社がある（写真4）。玄界灘に浮かぶ小呂島には、三女神を筆頭祭神とする七所神社がある。この



社は、かつて宗像神のみを祭っていたことが『付録』に記されている。福岡市香椎の名島神社（江戸時代は弁才天社）も、古くから宗像神を祭ってきたことが『付録』に記される。



写真3 唐津市加部島の田嶋神社



写真4 福岡市宮浦の三所神社



田島（田嶋・多島）神社は、東・西松浦郡に 12 社（『調』には 13 社）あり、いずれも三女神を祭る。伊万里湾内に多く、ここから内陸に入るルートに關与した人々が祭った神社と見られる。図 5 で見たように、ここから有明海沿岸までは濃厚な宗像神分布地帯となっている。

一方西海地方にも宗像神が多く分布する。前報で見たように、長崎県は千葉県と青森県に次ぎムナカタ神社が多い。そのうち対馬以外の五社は本島部西海岸にある。平戸市田平^{たびら}の宗像神社は、『日本三代実録』の貞観一三年(871)と同一五年(873)に見える「宗形天神」とされている。この神社は、平戸島と九州本土を隔てる平戸瀬戸の本島側に約 2km 入ったところにある。この神社は、著名な里田原遺跡^{さとたばる}の範囲内にある。この遺跡は縄文晩期に始まるが、最盛期は弥生時代前期から中期までで、後期までも続いていることが最近確認された。遺物も豊富で、朝鮮半島製の初期青銅鏡多鈕細文鏡^{たちゅうさいもんきょう}が甕棺墓から出土している。そのほかにも小型板状鉄斧、無文土器、天河石や瑪瑙の丸玉など、朝鮮半島からの直輸入と思われる遺物が多い[13]。海人族の交易中心地であったことが分かる。

ここから約 3 km に、平戸瀬戸に面した縄文時代のツグメノハナ遺跡がある。ここからは、100 点以上の石銚とともに多量のクジラ、イルカ、サメの骨が出土し、縄文海人の根拠地があったと見られる[14]。この石銚は沖ノ島でも多く出土しており、宗像海人族との繋がりが縄文時代に始まることを支持する。

さらに南下すると、西彼杵半島の北部、西海市中浦に宗像神社がある。さらに南下して長崎市の展望台稲佐山に登る長崎ロープウェイの乗り場のところに淵神社があるが、この主祭神が宗像三女神である。

長崎半島を回って雲仙諸峯の麓の橘湾に臨む海岸には、北から千々石町乙・小浜町富津・南串山町丙^{ちぢわ}（現在はいずれも雲仙市）と、三社の宗像神社がそれぞれ海岸の小湾内に祭られている。

橘湾の奥の有喜漁港のあたりからは、わずかな山越えで諫早市宗方の谷に入ることができ、すぐ有明海につながる。この宗方にある宗方神社は現在宗像神を祭っていないが、『太宰管内志』[15]は上記『日本三代実録』の記事はこの神社のこととし、『諫早市史』もこれを採用している。有明海に入るショートカットに祭られた神社と思われる。

五島にもいくつかの純宗像系社がある。西海にもう一つの古い海の道があったと思われる。この道は中期以降の遣唐使がとった南路であるが、それ以前からあった航路ではないか。

なかどおりじま
中通島上五島町（旧新魚目町）浦桑郷に、近年まで胸肩神社が存在した。この神社は、『調』の他『全国神社名鑑』[16]にも神社庁登録神社として記載されていたが、『平成データ』にはない。その跡地に立つ石碑には、社殿が昭和 62 年(1987)の台風で倒壊したため、近くの祖父君神社に合祀した旨が記されていた。



きしく いわたて
福江島の岐宿には三女神を祭る古社巖立神社がある。この神社はかつて岐宿湾中の宮の小島にあったのを移したものであるというが、由緒記によればこの島に祭られたのは桓武天皇の時代で、空海が入唐の際立ち寄ったとき島民から神のお告げを聞き、この島に社を建てることを勧め三女神を勧請したという[17]。このころの遣唐使は岐宿の西約 10 km の三井楽から出発していたが、岐宿はこの島北岸最大の集落であり、名も唐船の浦という深い湾があるので、空海らもここに停泊して風待ちをしたのではないかと。そして三井楽にも三女神のみを祭る柏神社がある。『調』は、そのほか三井楽にイチキシマを祭る市杵島神社を載せている。

4. 6 宗像神の分布から見える古代通商路

以上述べてきた海北道中と西海の宗像神を祭る主な神社を繋ぐと、朝鮮半島からの交易ルートが浮かび上がってくる。これを図 14 に示す。沖の島を経由するムナカタルート1では、ムナカタと繋がるルートの他に、直接響灘沿岸に達するルートがあったと思われる。これは特に弥生時代後半、鳥取県のむきばんだ 妻木晩田遺跡やあおやかみじち 青谷上寺地遺跡などから著しい量の鉄器が発見されているからである。鉄器の出土はさらに東に向かい、兵庫県や京都府の北部に鉄器製造基地がつくられる。このような多量の運搬物を運ぶ場合は、ムナカタに寄航せず対馬暖流を利用して沖ノ島から一気に下関市西海岸を目指すことが多かったと思われる。この沿岸には朝鮮半島の土器など多くの渡来人の痕跡が見られる。

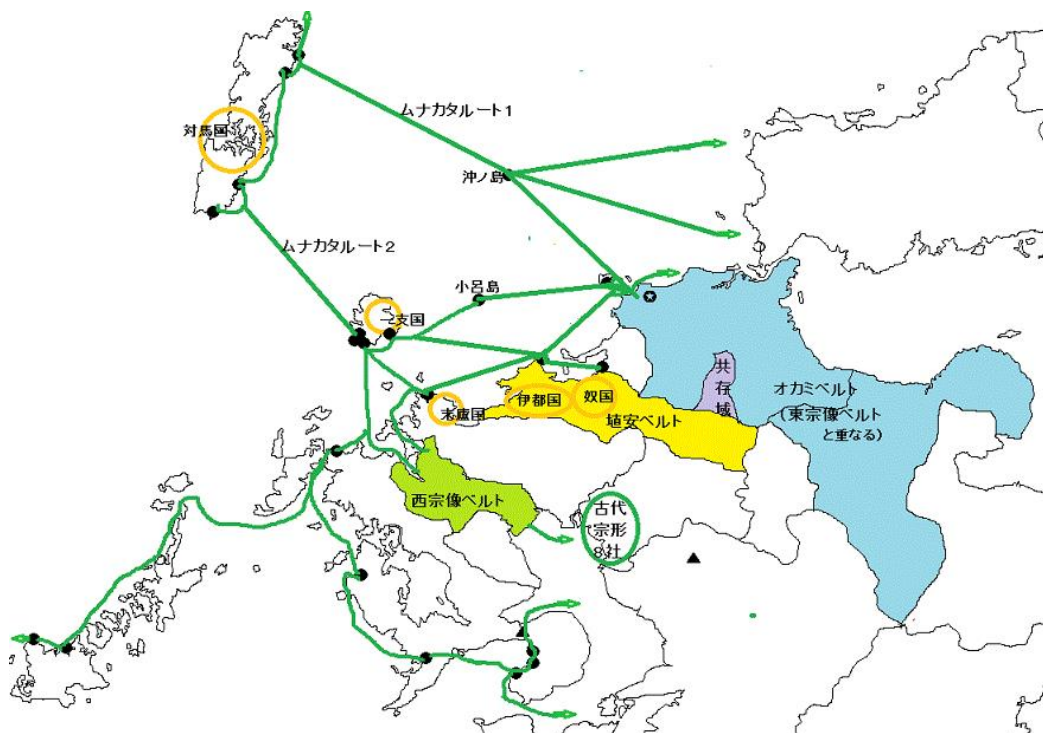


図 14 祭神分布から推定される北部九州沿海および関連する交易ルート



山口県は明治末期の神社合祀(前報参照)の影響を強く受け、残念ながら純宗像系の神社が殆ど残っていない。しかし下関市武久にはかつて宗像神社があったと記録されていて、ここの武久浜遺跡の石棺からは中国の半両銭が出土している。また弥生時代初めから宗像の影響を受けてきた角島にも、2社の厳島神社があったことが、『調』に記されている。ここは山陰へ向かう絶好の寄港地であったと思われる。

ただし朝鮮半島へ向かう逆コースは、海流に逆らうので手漕ぎでの直接の船行は困難であったと想像される。したがって沖ノ島への最短距離のムナカタから出発することが多かったと思われるので、ムナカタの重要性が失われることはなかったであろう。

一方対馬南部の宗像神を祭る2神社は、いずれも良港に面していて、壱岐西岸郷ノ浦の渡良三島に近い。これが壱岐を経由するムナカタルート2の中心航路であったと思われる。ここからは、必要により上記石田郡南部や小呂島、三所神社のある宮浦などを経由してムナカタへ向かったと思われる。一方松浦半島の12社の田島神社や図5の「西宗像ベルト」地帯は、伊万里湾から有明海へ出る交易ルートの存在を推定させる。渡良三島は、伊万里湾に直行するルートや、西海や五島方面への起点として絶好の位置にある。西海からは高来半島を迂回するか、諫早市宗方で低い峠を越えるかで有明海へ出るルートの存在も推定される。

『魏志倭人伝』に登場する国々のうち所在についてはほぼ異論のない5国を図上に示したが、そのうち本土部の伊都国と奴国は埴安ベルトの中にある。このベルトが甕棺文化以来のものであれば、このベルトは邪馬台国時代にもあったことになる。そうすると、『魏志倭人伝』に出る不彌国以降のいくつかの国々も、おそらくこのベルト内にあったのではないかと想像される。ただし投馬国と邪馬台国はいずれも大国であるので、この両者を埴安ベルトの中に収めるのは難しいかも知れない。これ以上『魏志倭人伝』の国々の所在についての議論をこの小論中に容れることは難しいので、別報に譲ることとする。

ムナカタルート1は対馬の寄港地を選べば邪馬台国連合との相互干渉はないと考えられるが、ムナカタルート2を形成している宗像系神社もこれらの国々の中心部をできるだけ避けているように見える。壱岐で宗像からは反対側の西岸に根拠地があるのは、原の辻遺跡を中心としたと思われる一支国中心部を避けたためであろうが、一方伊万里湾へ入るルートや西海や五島へ向かうルートの起点としては絶好の位置にある。



4. 7 宗像神信仰域についての考察

1) 分裂している宗像神信仰域

図 5 に見たように、宗像神信仰の強い地域は北部九州東部の東宗像ベルトと西部の西宗像ベルトとに分かれている。前者については、前報で見たように弥生文化の東方への伝播に宗像海人族が果たした役割を示すものと考えられる。オカミ神などとの分布の重なりも、渡来系の人々の拡散と結びつけて考えることができる。

しかし北西九州における宗像神の広い分布は、このような考えでは説明できない。その中でも、宗像神が特に集中しているのが、佐賀県の伊万里湾から有明海へ到る西宗像ベルトである。この西松浦郡と杵島郡が作る回廊は、その南の宗像神が殆ど見られない東彼杵郡および藤津郡と対蹠的である。特に杵島郡では宗像神を祭る 15 社のうちイチキシマのみを祭る神社が 14 社と圧倒的で、この地域が古くからイチキシマ信仰を持っていたことを思わせる。この回廊は、前述の田島神社群が示唆するように、伊万里湾へ入る海上交易ルートを有明海方面に繋げるものと考えられる。すなわち、宗像神を祭る宗像海人族が、海路だけではなく、これに繋がる内陸交易路にも関与していたことを物語ると思われる。このことは前報で、中国地方など各地で見られることを指摘した。

この内陸ルートは、対馬一壱岐を経由する国際交易ルートを、有明海の対岸筑後地方から熊本県方面へ繋げることが主な目的ではないか。次項に述べる古代宗形社があった地域も、そのターゲットの一つであったと思われる。熊本県の西北部にも、図 5 に見るように宗像神を祭る神社が多い。その中心菊池郡の菊池市宗方に、宗方八幡宮がある（ただしこの神社は、諫早市の宗方神社と同様、現在は宗像神を祭っていない）。

2) 古代記録との対比

前報で紹介したように、古代筑後地方に宗像神を祭る神社が多く存在したことが記録に残る。天^{てんぎょう}慶七年(944)成立の『筑後国神名帳』[18]に、筑後 7 郡のうち御原・御井・三潨・上妻の 4 郡に宗形の名を冠した神社が計 8 社も見える（図 14 参照）。そしてそこには、宗形神以外の海神が全く記されていない。宗形神の起源が古代以前に遡り、他の海神はこの頃殆ど祭られていなかったことが分かる。

ところが、『平成データ』には、現在筑後地方にムナカタの名を冠する神社は全く登録されていない。上記 4 郡には現在宗像神を祭る神社が 12 社あるが、上記の 8 社とは必ずしも対応しない。たとえば『筑後国神名帳』では御原郡に宗形神、宗形若草神、宗形御弁天社の 3 社が記されるが、『平成データ』には宗像神を祭る神社が全くない。海神としては住吉神のみ 7 社登録されているので、あるいは祭神が交替したのであろうか。



現在この4郡には、合計で志賀神が52社、住吉神が65社、玉依姫が6社も祭られ、それらの多くはそれぞれの神を表す社名を持つ。少なくとも筑後国については、国内神名帳が編まれた時期以降に大幅な信仰世界の変化が起こったようである。

この古代筑後の宗形神は、一部の歴史家の云うように、宗像神のルーツが筑後であることを意味するものではない。上記の筑後宗形神の神階（神社に授けた位階）は、従五位下が1社であとはこの当時の神階としては最低の正六位上である。この時期には、公式記録から見て筑前宗像郡の宗像神社は少なくとも従一位にはなっている。発祥の地の社であれば、それなりの神階にあってしかるべきであろう。現に残っている他諸国の神名帳の中で、ムナカタ神は上野國で正四位（下）、尾張國で従二位と正四位下、備前國で正四位下と従四位上、安芸國で正二位（以上）二社と従三位のように、すべて四位以上の神階が記されている[18]。おそらくより格下の神社は省略されていたと思われる。筑後国のように低位階の神社まで記せば、おそらくどこの国にもおびただしい数のムナカタ神が祭られていたと推定される。このことは、ムナカタの名を冠した神社が、現在宗像神を祭る神社の41分の1しかないことから推測される（前報参照）。この古層の宗像神信仰は、前報で指摘したようにイチキシマ信仰であったと思われる。これはイチキシマのみを祭る神社が有明海を挟んで筑後と相對する杵島郡に14社（かつて18社）と多く、また大分県大野郡のような山間部でも18社（かつて28社）に祭られていることから支持される。

このように考えると、本来宗像神（イチキシマ）の分布には図5のような大きな空白域はなくて、沿海地方や内陸水運（一部陸行を含む）の盛んだった地域に洩れなく祭られていたに違いないのである。その中に独自の神信仰を持つ人々が入り込み、伊都国や奴国のような「クニ」の連合を作り結果として宗像神を祭る人々が排除されたものと思われる。そしてこれらの国々は専用交易路を構築したので、これに参加する海人をも専属化したのではないか。そしてその祭る神の名も、対馬や壱岐の交易の重要中継地で祭られている玉依姫などに変えられたのであろう。対馬や壱岐でもそれら諸国の交易に参加していなかった地域では、海人が引き続き宗像神を祭り、相互に干渉がないように交易を続けていた。これが図13・14に見るような宗像神を祭る神社の配置として残ったと思われる。



4. 8 宗像神信仰中心地域の検討

1) ムナカタ—遠賀地域

前述のように、宗像神信仰が顕著に残る地域は北部九州の東西に分かれる。ここでは宗像神信仰の成立過程を探るため、その発祥の地域と考えられている東部地域について、祭神内容の詳細を検討する。

図 15 はムナカタ—遠賀地域について宗像神を祭る神社の分布を、祭神別にみたものである。宗像郡では、沿岸部よりも釣川の中流域からその支流域に多く分布する。これは多くの古社の起源が入り海の発達していた上古代に遡ることを示唆している。

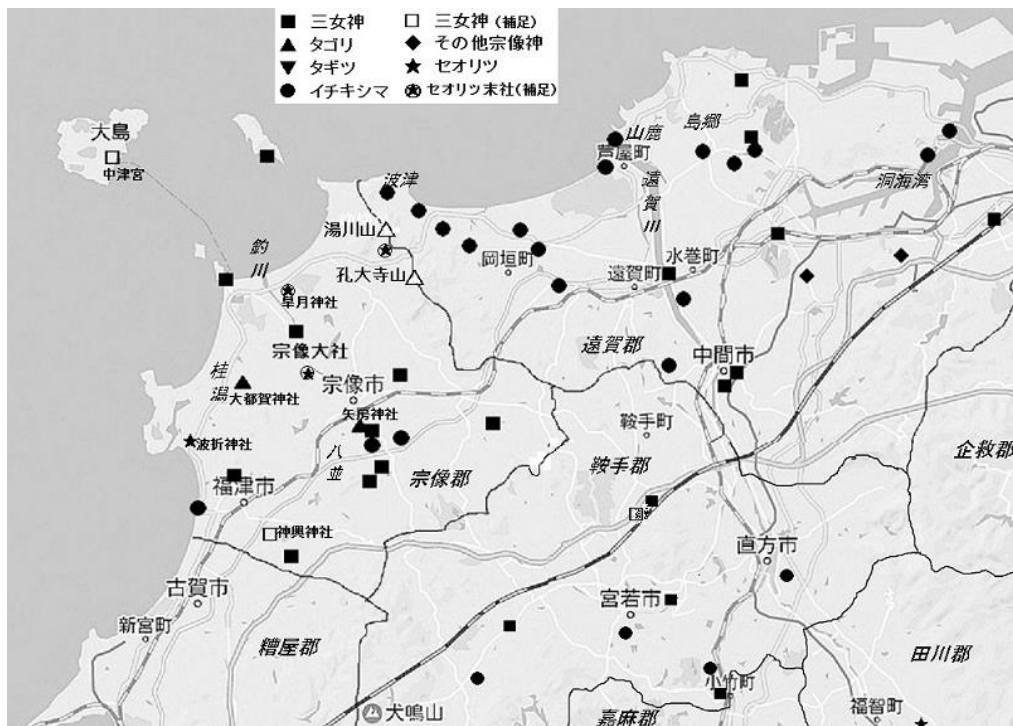


図 15 宗像・遠賀郡を中心とする宗像神を祭る神社の祭神別分布

これまで見たように宗像郡では三女神を祭る神社が多いが、タゴリのみを祭る神社が 2 社ある。沖ノ島祭祀開始との係わりが議論される 4 世紀後半の東郷高塚前方後円墳のすぐそばに、オオナムチとタゴリを祭る古社矢房神社がある^(注 4)。この神社は田熊石畑遺跡とも至近距離にあるが、その遺跡内にかつてオオナムチを祭る示現神社があった（現在は約 500 m 西に移動）。これら遺跡がある八並川（釣川の支流）の谷には、オオナムチと共にタゴリとの子神味耜高彥根命^{あじすきたかひこねのみこと}および下照姫命^{したてるひめのみこと}が 3 社の原神社で祭られる。

タゴリとオオナムチは、かつての桂瀨に面した福津市奴山の生家大塚前方後円墳のすぐそば^{おおつか}大都加神社にも、宗像君徳善など古代宗像を支配した宗像君一族と共に祭られている。沖ノ島祭祀に参画し、後に



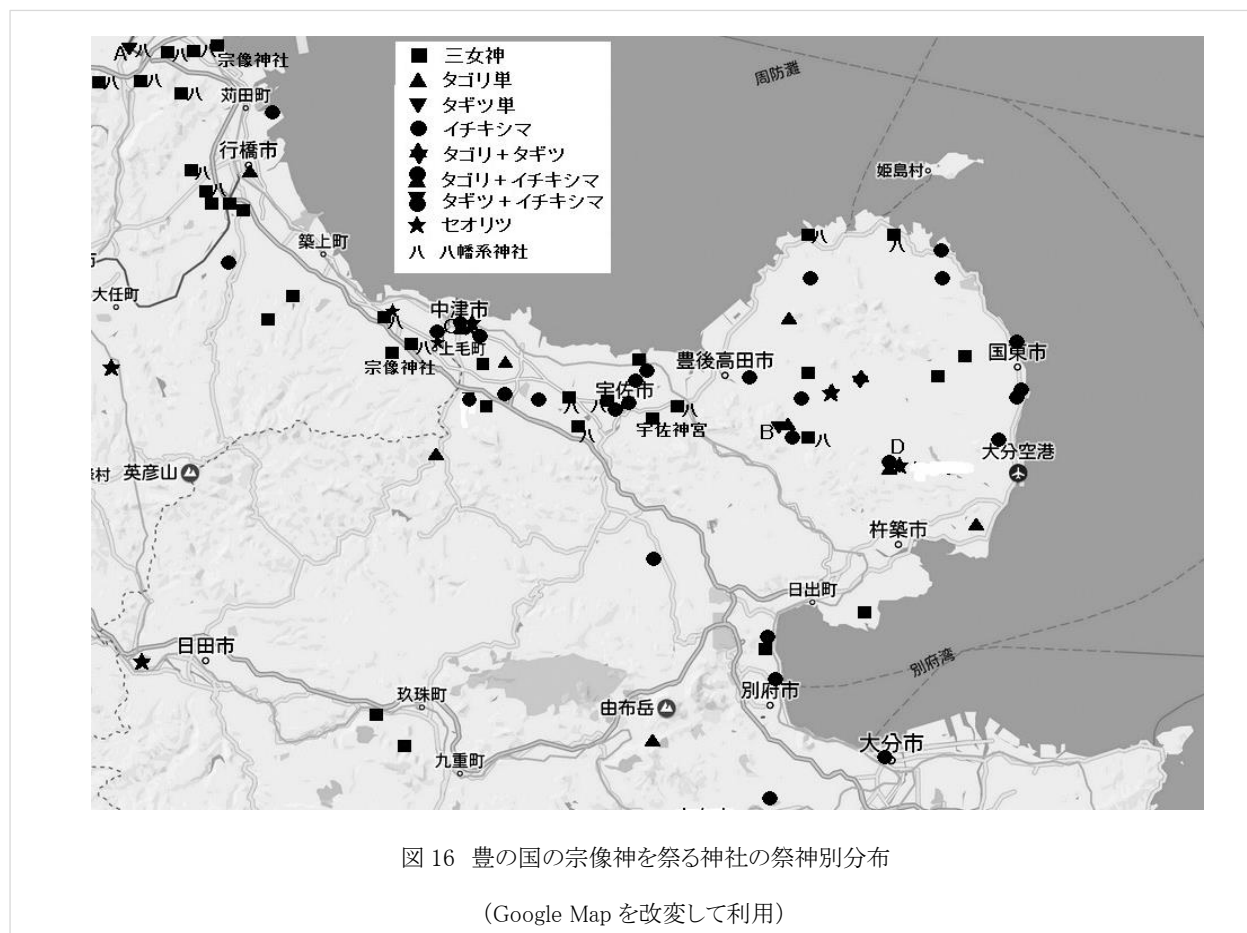
はその祭祀を中心となって継承したと考えられている宗像君は、出雲系の血を引く氏族であつたらしい（次報に詳述予定）。出雲大社瑞垣内の筑紫社の祭神タゴリが、宗像大社でも祭られるのは当然である。

一方タギツは単独では祭られていないが、次項でタギツとの関連を指摘する瀬織津姫（他の表記もあるので以下セオリツ）が津屋崎の古社波折神社に主祭神として祭られている。『宗像郡誌』によると他に3社の境内社に祭られている。うち釣川河口に近い辻八幡社内の皐月神社は、かつて宗像神社の頓宮があつたと記録される隣接地にあつた神社で、現在でもその跡地で祭りが行われる。宗像大社との繋ぎの深さを感じさせる。

一方遠賀郡域では、イチキシマのみを祭る神社が、宗像郡との境界山地の東麓に沿って多く、遠賀川中流域や若松区西部にも多い。このような分布は、後に図 18 で示す古遠賀湾および岡垣町の入り海、および深く入り込んで遠賀川河口と繋がっていた古洞海湾の沿海に沿っている。いかにも海人の祭る神にふさわしい立地である。古洞海湾と続く水路で囲まれた現在の北九州市若松区は古くは恩賀島おかしまと呼ばれていた。その中のかつての島郷村にもイチキシマを祭る神社が多い。

2) 周防灘沿岸部

図 16 に上記地域と並んで宗像神が多く分布する周防灘沿岸部の詳細を示した。





この地域の特徴は、宇佐神宮の影響で宗像神が八幡系神社に多く祭られていることである。現在の宇佐神宮と同様三女神を祭る場合が多いが、Aで示した小倉南区の古社旧県社の蒲生八幡宮は、宗像神としてタギツのみを祭る。このことは、江戸時代の『豊前国志』[19]や「蒲生社来由略記」[20]でも同様で、この神社に八幡神が勧請される以前から女神が祭られていたとも記されている。Bで記した豊後高田市の二宮八幡社は、その名にもかかわらず八幡神（応神天皇）がなく、タギツのみが祭られている。これらから、八幡神が普及する以前にこの地域には姫神信仰が広まっていた、その神はタギツと考えられていた時期があったことを示唆する。宇佐神宮では八幡神以前に女神が祭られていたことは宇佐神宮発行の『宇佐神宮由緒記』にも書かれており、このことは定説になっているようである。

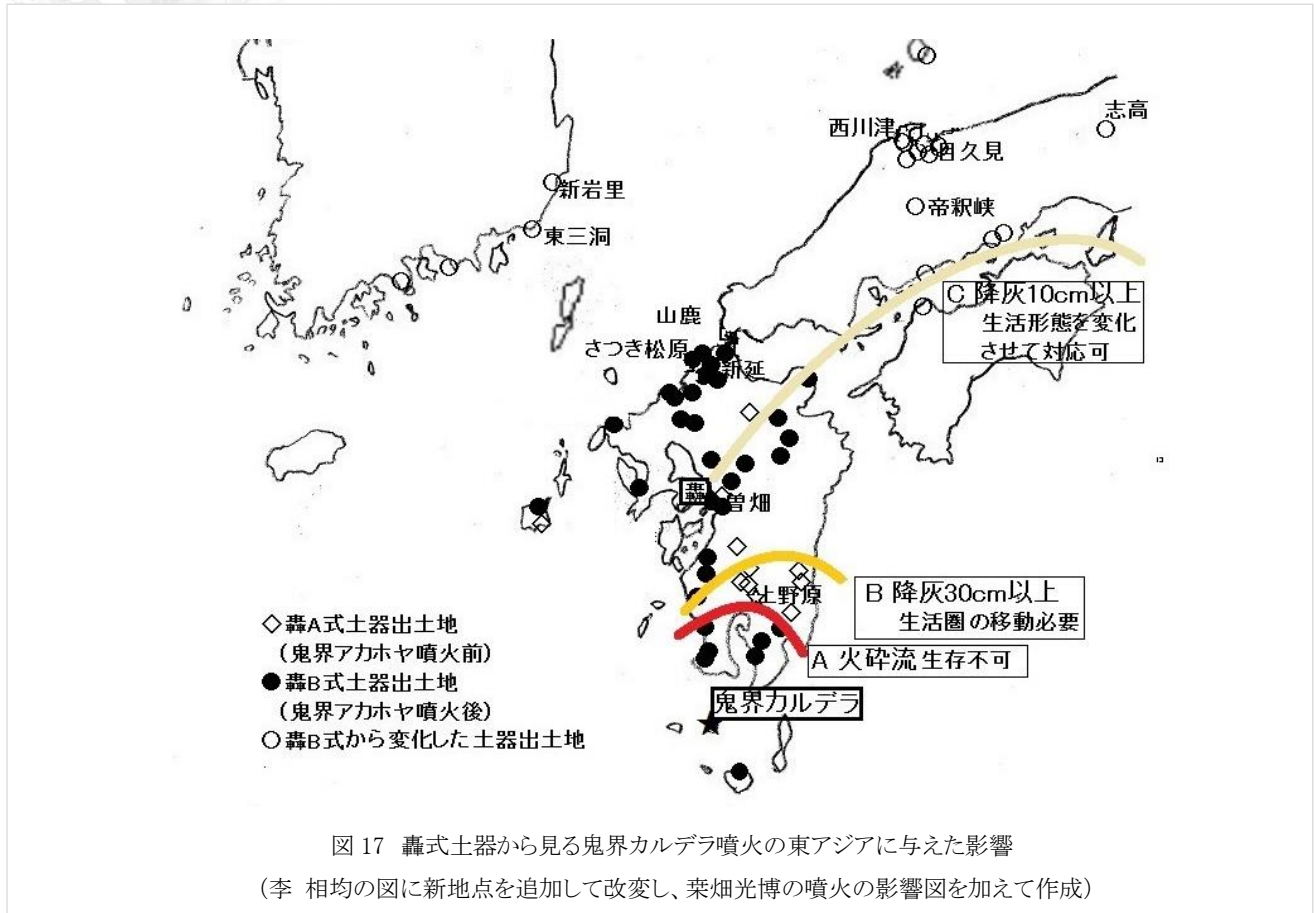
一方図中にCで示した中津市の古社くらはしはま闇無浜神社には、宗像三女神のタギツの代わりにセオリツがたけみくまり入っている。同様の例は滋賀県野洲市（旧中主町）の長澤神社、大阪府千早赤坂村の建水分神社、鹿児島県出水市の厳島神社（この神社は『平成データ』にはないが鹿児島県神社庁に登録されている）などにあって、いずれも比較的辺地にあることから、かつてタギツがセオリツの名で祭られていたという推測を補強する。記紀神話以来タギツが宗像神として定着した後でも、辺地ではかつてのセオリツの名が残っている所があったと解釈できる。図中Dで示した杵築市（旧大田村）の歳神社は三女神のタギツの代わりに「織津姫」という神を祭るが、これが瀬織津姫の脱字によるものとする、これと同様のケースである。上記闇無浜神社は豊の国の古名を持つ神「豊日別」を祭る由緒の古い神社なので、神名変更に従わなかったとも考えられる。このセオリツ→タギツの祭られかたは、ムナカタのセオリツ神が三女神成立の一つの要素であり、その女神が豊の国起源である可能性を示唆する。

イチキシマのみを祭る神社は宇佐以東に多い。特に国東半島沿岸の港附近に多く、対岸の伊予地方への出発地に祭られた神であることを推測させる。別府市から大分市にかけてもこの傾向が続く。

4. 9 宗像神の起源についての考察

1) 鬼界アカホヤ噴火の縄文文化へのインパクト

有名な霧島市の上野原遺跡に見るように、縄文時代早期の南九州にはかなり高度な文化が発達し、丘陵上などで狩猟採取生活を営んでいた（以下主として栗畑光博[21]による）。この生活環境を一変させたのは、約7300年前に起こった九州島南端と屋久島との間の海上で起こった鬼界カルデラの噴火である（図17）。硫黄島（鬼界ヶ島）はその火口壁の一部である。その火山灰は風に運ばれて遠く韓国南部や東北地方南部にまで達した。古くから南九州で知られていたアカホヤと呼ばれてきた赤っぽい地層が、この噴火の火山灰によることが明らかになっている。



この噴火の時期に九州で多かった土器が轟A式で、同図に見るように主に南九州山間部中心に分布する[22]。これは熊本県宇土市の轟貝塚から名付けられた。これらの遺跡は鬼界アカホヤ噴火以降消滅し、これ以降九州の遺跡は北部に多くなる。植生が壊滅的打撃を受けた南九州から多くの移住者があったと見られる。九州の土器は噴火以降轟A式から変化した轟B式が中心となり、急増した貝塚などから多く出土する。陸上での狩猟採集が困難になったため、多くの人が魚介類の採集に依存した生活に変わったと見られる。九州海人族の誕生である。

この頃気候が温暖化し、遠賀川中・下流域には大きな「古遠賀湾」が出現していた。多くの貝塚が、この内陸水面に沿って形成された。図 18 に、そのうち縄文時代晩期まで続く主な貝塚を示した(芦屋町史[23]などによる)。隣接する宗像市上八のさつき松原海岸からも、最近轟B式土器が出土したので、この頃から同一文化圏に属していたと考えられる。

轟B式土器の影響は、九州を出てさらに山陰から山を越えて瀬戸内地方へ、また海を渡って朝鮮半島南部へ到達する。地理的に見て、北部九州の海人族がこの文化伝播に関与したと考えられる。

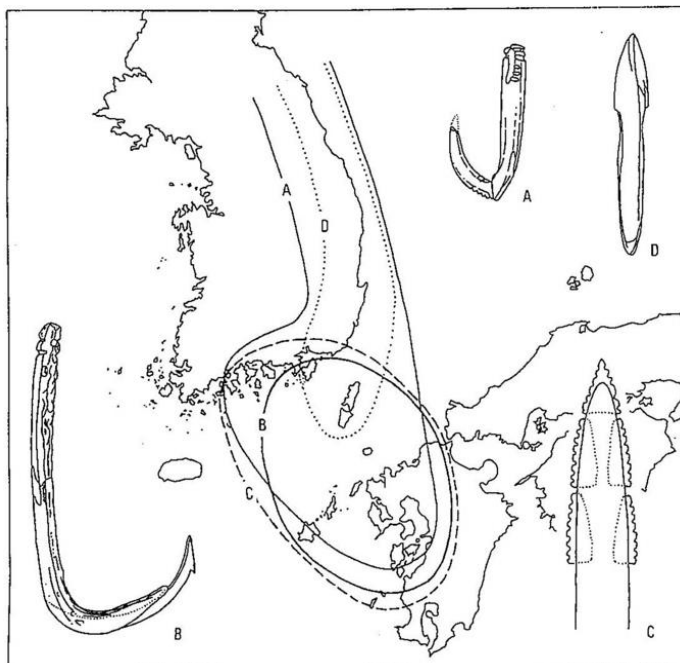
図 19 に、縄文時代の漁撈文化の国際的な繋がりを示した[24]。北部九州と朝鮮半島南部の海人が、共通の漁業技術を持っていたことが分かる。同図の石銚(C)は、沖ノ島でも多量に出土している。上記



さつき松原遺跡と沖ノ島では轟B式に次ぐ縄文時代前期後半の曾畑式土器が出土しているが、この土器は図14に示した釜山市の東三洞貝塚などからも出土している。ムナカタと沖ノ島がこの国際交流文化圏内にあることが分かる。この図中のオサンリ（鰲山里）型結合釣り針は、松江市の西川津遺跡や鳥取市の青谷上寺地遺跡など顕著な山陰の弥生遺跡からも出土しており、このような海人の交流が弥生時代にも引き継がれ、さらに東方へ拡散したことを示している。



図18 宗像および遠賀郡の主な貝塚と貝輪を持つ女性人骨出土地



A: 鰲山里型結合釣り針 B: 西北九州型結合釣り針
C: 石鋸装着銚 D: 回転式離頭銚

図19 縄文時代東アジアの漁具分布
(渡辺 誠による)



2) 女性による祭祀の伝統

福岡県芦屋町の山鹿貝塚から出土する土器は、前記の轟B式に始まり、曾畑式、中期の船元式、阿高式などから、後期の中津式や鐘崎式など、さらに弥生時代直前の晩期後半に至るまで、約3000年に亘って続いている。この場所が、縄文海人族にとっていかに重要であったかがわかる[25]。

なかでも注目されるのが、後期の層（約3500年前）から出土した18体の人骨とそれに伴う出土品である。このうち数体の女性は豊富な装身具を伴っていた。とくに、ほとんど同時に埋葬されたと思われる2体の成人女性は、それぞれ19個および26個の貝輪を腕にはめていた（写真5）。山鹿貝塚では全7体の女性人骨が多数の貝輪を着けていた。これに対して男性の人骨は、ほとんど装身具を伴っていなかった。これはこの時期の東日本とは大きく異なる。東日本での縄文人では装身具を着けていたのがほとんど男性に限られていたのに対し、西日本では女性がつける比率が高かった[26]。南九州から北上した縄文人は、もともと女性を尊ぶ風習を持っていたらしい。



写真5 縄文時代の芦屋町山鹿貝塚出土の貝輪を着けた女性人骨（「芦屋歴史の里」で撮影）

岡垣町^{やはぎ}の矢矧川流域の糠塚の榎坂貝塚（図18）からも、29個もの貝輪をつけた女性の人骨が発掘された[27]。これら貝塚のように多数の貝輪を伴った例は、他地方にはない。先に紹介した宗像市さつき松原遺跡からわずか300mほど鐘崎寄りにある鐘崎^{こうじょう}（上穴）貝塚からも、女性の人骨とともに3個の貝輪が見つかっている。

それぞれ土器様式の名となったことで有名な、轟貝塚と阿高貝塚からも、貝の腕輪を着けた女性の骨が出土している。女性が貝輪を着ける慣習が中・南九州から来たもので、土器の北上に伴っていたことが推測される。



貝輪は、岡山県の船元貝塚でも出土している。山鹿貝塚から船元式土器が出土していることからわかるように、縄文時代中期以降北部九州では瀬戸内地方との交流を示す遺物が多くなっている。沖ノ島でも中期には瀬戸内地方など宗像以東の土器が多く、船元式土器も多数出土している[28]。前期以来の海人による交流の伝統が縄文時代中期以降も受け継がれていたことを示す。

宗像海人族が女神を祭ることの起源は、このような縄文海人族の伝統を受け継いだものではないか。神に仕え、神の託宣を受けた古代の巫覡（かんなぎ）^{ふげき}は、卑弥呼の例のように、女性であることが多い。日本神話の最高神天照大神^{あまてらすおおみかみ}も、書記本文ではまず大日靈貴^{おおひるめのむち}と書かれているように、元々は位の高い巫女^{みこ}と考えられていたらしい。時代は下るが、現在でも台湾や中国沿海部を中心に信仰を集める漁業・航海の守護神媽祖^{まそ}は、宋代に実在した官吏の娘であったが、海洋気象や海難事故を予測する能力を身につけ、多くの人を海難事故から救ったという。

山鹿貝塚に葬られていた貝輪をつけた女性も、おそらくこのような巫女であったであろう。前記春成の著書によると、このような貝輪は幼いときにつけたものらしく、ふつう取り外しができなかったと考えられる。したがって労働もできず、少女の頃から特別な存在として育てられていた。そのような巫女で特に予知能力の優れたものは、やがて神と崇められるに至ったであろう。

任東権によると[29]、韓国東海岸の漁村に祭られている海神は、ほとんど女神であるという（一方西海岸では男性の海神を祭る）。このような信仰の習俗の分布も、図19の漁具の分布と符合している。海神としての女神信仰は、このような縄文時代以来の日韓古代海人族の共通習俗を母体としていると思われる。

女性の巫女は、最近まで南島（琉球列島）で健在であった。南島では、祖霊の祭りをノロ・ヌルまたはユタと呼ばれる巫女が執り行ってきた。沖縄ではピラミッド形の巫女の組織があり、最上位の巫女は聞得大君^{きこえおおきみ}と呼ばれ、斎場御嶽^{せーふあうたき}で行われるその即位式は、御新下り^{うあらう}と呼ばれ国王の即位式をしのぐ重要な式典であったという[30]。各所にある御嶽^{うたき}は、もともと男子禁制であった。

現在でも奄美大島などで農耕儀礼として行われている女性による平瀬マンカイという儀式は、本来巫女による海上の安全を祈るものであったであろう。このような南島の信仰文化は、縄文以来の古代海人族の習俗を残していると言えよう。



3) イチキシマ信仰の故地

以上見てきた北東部九州の遺跡や遺物から見える縄文海人族の伝統は、ムナカタがその範囲に含まれるとしても、その中心は遠賀川河口付近にあるように見える。大河である遠賀川の流域がその中心になるのは、きわめて自然である。しかしそれでは、宗像神に直接繋がらない。

先に見たように、旧郡別に見ると宗像神は 17 社の宗像郡に比べ遠賀郡で 20 社とより多く祭られる。そして遠賀郡ではイチキシマのみを祭る神社が 14 社と多い。図 3 に見たように、遠賀郡のイチキシマ信仰は明治初期の時点ではより顕著であった。このことは、イチキシマ信仰の故地が遠賀郡にあるのではないか、という疑いを抱かせる。前報で考察したように、宗像神のうちで最も起源の古いと思われる神はイチキシマであり、その語源は「齋^{いつ}く島」と考えられる。これは上記山鹿貝塚の貝輪を着けた高級巫女のイメージと重なる。

平安時代中期成立の辞書『和名類聚抄^{わみょうるいじゅしょう}』中の「国郡郷考」は、遠賀郡の郷名中に「宗像郷」を記している[31]。これについては隣の宗像郡の郡名が混入したというのが定説のようである。しかしこれまで述べた宗像神の分布から見ると、ここに宗像郷があってもおかしくはない。同書で遠賀郡中の郷は、山鹿郷、宗像郷、内浦郷^{うつら}（現在の岡垣町西部海岸沿いの同名地に比定されている）の順に挙げられていて、宗像郷を山鹿郷と内浦郷の間の岡垣町の主要部から芦屋町西部とすればつじつまが合う（図 15 参照）。ここにはイチキシマが特に多く多く祭られている。

このようなことから、「むなカタ」という地名の示す範囲が、ムナカタ（旧宗像郡）からもっと東に広がっていたのではないかという疑問が浮かび上がる。果たしてこのような「大ムナカタ」が存在したのだろうか。この疑問を解くためには、「むなカタ」という地名の由緒についての考察が必要である。

4) 地名ムナカタの語源

ムナカタは、ユニークな地名である。地名辞書で全国を調べても、ここ宗像と関わりのなさそうなムナカタは見つからない。ほとんどは、ムナカタの名を持つ神社があったため名付けられた地名である。

ムナカタには、はじめから宗像という字が当てられていたわけではない。宗像という表記は、「記紀」にはない。神代紀第六段本文には胸肩、応神紀と『古事記』には胸形、雄略紀には胸方と書かれている。『書紀』天武二年(673)には、胸形君の名が登場する。これが『続日本紀』になると、すべて「宗形」になる。大宝二年(702)の『正倉院文書』に筑前国島（志摩）郡と豊前国仲津郡の住民に「宗形部」の人が記されている。和銅四年(711)～霊龜二年(716)の『長屋王家木簡』にも、「宗形」と書かれている。



「宗像」の初出は、『肥前国風土記』および『筑前国風土記』（逸文）である。律令制が確立した時期の和銅六年(713)に「好字令」が發布され、国・郡・郷の名前を見栄えのよい字二字で書くように定められた。これは風土記編纂の勅令に含まれていたもので、風土記ではこの表記が採用された。そして延喜式えんぎしき（延長五年＝927年に發布された律令の施行細則）内の神名帳じんみょうちょうに宗像郡宗像神社と書かれ、以降これが定着したようである。

しかしその『延喜式神名帳』にも、下野国の一社と伯耆国の一社は胛形神社と書かれている（胛は胸の古形）。前者は現在の栃木県小山市の胸形神社で、後者は鳥取県米子市にある宗形神社とされる。前報で見たように、胸肩など古名をとどめている神社が各地に多数現存する。前述のように最近まで五島にも存在した。

このように古文書や古社の名に胸のつく表記が多いことは、ムナカタの名が胸に由来していることを示唆する。ムネ（古音ムナ）と読む胸・棟・宗は本来同根のことばである。意味はこの順序で抽象化しているので、古さもこの順序と考えてよいであろう。胸をムナと読む胸板・胸ぐら・胸毛・胸算用などは今でも普通に使われる。ムナがもともと胸の意味で使われていたことがわかる。

ムナカタの語源については多くの説があるが、いずれにも難点がある（注5）。このなかで胸に着目したのが、人類学者で考古学・民俗学に詳しかった金関丈夫の「海人族の刺青説」である[32]。中国の史書『魏志』中の有名な「倭人伝」には、「今倭の水人、好んで沈没ぎょこうして魚蛤を捕らえ、文身はらしました以て大魚水禽を厭う。後やや以て飾りとなす。」[33]とある。はじめは潜水中の危険に備えて刺青したが、いまでは飾りのためにしているというのである。胸という字には文から変わった×が入っている。文字を発明した殷の人は、胸に文の刺青をしていたという。文は竜や蛇のウロコの形である。

宗像大社から大島・沖ノ島への玄関口こうのみなと神湊を見下ろす丘の上に、宗像で唯一の装飾古墳である桜京古墳（国史跡）がある。この横穴式石室の壁面に残る文様が、魚のウロコを表すとされる三角文である[34]。この近くには海人の生活の跡を示す浜宮貝塚があるので、この古墳を含む多くの古墳群は海人族の墓域と考えられている。

ただしこの説には、日本語の語法として致命的な問題がある。それは、具象語の後におかれた「カタ」は、人形にんぎょう（人形）・船形ふながた・クワガタ（鍬形）など多くの例が示すように、前に置かれた具象語の形を指す表現だということである。三角のウロコ紋の入れ墨であれば、「鱗形」などと言うはずである。

「むなカタ」は「胸のような形」という意味以外には考えられない。では胸の形をしたものとは何か。



古代の地名は、多くその地形から来ている。ムナカタの場合ユニークな地形は、「宗像の四つ塚」であろう。その中でも高い湯川山（標高 471 m）と孔大寺山（標高 499 m）の 2 山は北東海上に突き出ている、北部九州の海岸線は宗像でほぼ直角に折れ曲がる。したがって、この 2 山は東西いずれの海上からも遠くから望むことができ、航海者の絶好のメルクマールになっている（写真 6）。海岸に突き出たこのような二山の並びは、意外にも他地方にはほとんど見付からない。

a) 福岡市志賀島展望台（湯川山の南西約 32km）から望む



b) 北九州市藍島（湯川山の東北東約 28km）より望む

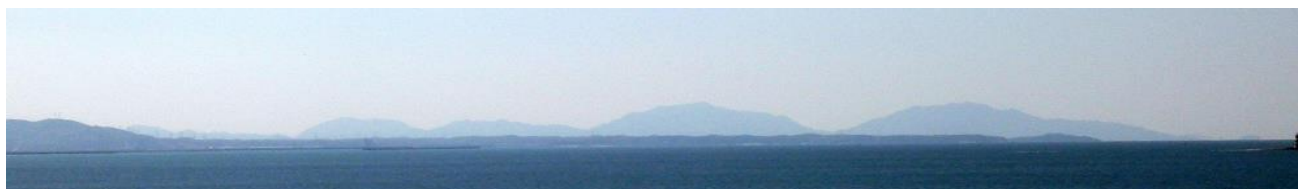


写真6 東西両方向の海上から見た宗像の四つ塚

やや低い湯川山が海側にあるため、斜め海上から見るとこの 2 山はほぼ同じ高さに見える。ムナカタとは、この 2 山を女性の胸の盛り上がりとした地名ではないか（ややごつごつした乳房ではあるが）。山や丘などの盛り上がりや女性の胸にたとえるのは、古代人らしく具象的で、素直な発想である。海人仲間にはこれ以上わかりやすい地名はなかったであろう。ムナカタの名が全国に広まったのも、うなずける。ムナ（ムネ）に当てる漢字が歴史的に胸→棟→宗と変わったのも、「高いところ」と云う意味が抽象化して行った過程を示す。

この推定が正しければ、重要な推論が導かれる。古代ムナカタの範囲は、湯川山と孔大寺山の西側のかつての宗像郡だけではなく、この 2 山を同様に仰ぎ見る東側をも含んでいたのではないかと、いうことである。少なくとも遠賀郡の西部、遠賀川河口付近までが、その範囲に入るのは当然である。これを今後「大ムナカタ」と呼ぼう。

この推定は、古代の「遠賀郡宗像郷」の記録と符合するだけでなく、宗像神、なかでも図 15 などに見たイチキシマを祭る神社の分布をよく説明する。



4. 10 三女神の起源と沖ノ島祭祀の意義（予備考察）

三女神のうちイチキシマが最も古層の神であるという前報の推定は、本報でも裏付けられた。イチキシマはおそらく始め縄文海人族が祭った神であり、その信仰発祥の地は大ムナカタ、そのなかでもムナカタの4つ塚の東から遠賀川の下流域にかけての地域と推定される。

残る二神の起源についてはさらに歴史的検討が必要で詳細は次報に譲るが、ここで大まかな輪郭を述べておく（この二神の神名が沖ノ島の自然を表したものという説明がよく行われているが、これには大きな難点がある^{（注6）}）。

タゴリは、出雲の主神オオナムチと婚姻して二児をなしたという前報で紹介した説話からわかるように、出雲との繋がり強い神である。ムナカタにタゴリを主神として祭り出雲神との繋がり深い2社があることを先に述べた。

これに対してタギツは、単独で祭られることが少なく、出自が掴みにくい。

北部九州では、周防灘沿岸の2社でタギツが単独で祭られている（図16）。いずれも八幡系の神社であるが、その1社の由緒はタギツが八幡神勧請以前の古い神であったとする。一方中津市の古社に三女神のうちタギツが瀬織津姫（セオリツ）に置き換えられた形で祭られていて、このようなケースは他にも2例ある。このことは、この二神は本来同神であって、どちらかが名を変えたという推測を生む。

セオリツは津屋崎の波折神社にも祭られていて、古くは他にも3社が祭っていたことを先に述べた。一方江戸時代の『筑前国続風土記付録』は、この「波折宮」の祭神を貴船神と書く。これについて福岡藩の国学者青柳種信^{（注7）}が書いた同社の由緒書には、「当社に祭るところの神は瀬織津姫大神 また木船神とも称え申す」とある[35]。ここにセオリツと貴船神（木船神）＝オカミ神との接点が現れる。セオリツをタギツと同神とすると、タギツとオカミ神との関係が浮かび上がる。このことは、先に見た北部九州東部でのオカミベルトと宗像神信仰域との重なる理由を説明する。

宗像神社に伝えられた古文書の一つ鎌倉時代成立とされる『宗像大菩薩御縁起』[36]には、「貴船大明神」が大宮司館^{（注8）}に安置されていると書かれている。宗像神社は、オカミ神との繋がりが深かったのである。次報では、これら諸神の間の関係をさらに掘り下げたい。

三女神の素性が明らかになれば、なぜその誕生を語る誓約（うけい）神話が創られたのか、そしてその神話と沖ノ島祭祀との接点が明らかになってくると思われる。



注

（注1） 東海地方など遠方で異常に宗像神を祭る比率の高い諸県の社名には、八王子または八柱^{やばしら}を名前に持つ神社が多く見られる。これらの神社の全てが、記紀神話で天照大神^{あまてらすおおみかみ}と素盞鳴命^{すさのおのみこと}（『古事記』に須佐之男、以下スサノオ）と^{うけい}が行った誓約の際に三女神と共に出生した五男神を共に祭っている。すなわち、この八柱または八王子とは、誓約で生まれた八神の意味なのである。この八王子は、本来祇園信仰の祭神牛頭天王^{ごずてんのう}の八人の王子の意味であった。明治神祇制度下で神仏の分離が強制され、牛頭天王も殆どがそれと習合していたスサノオに名を変えられた。そしてその子神の八王子も、誓約で生まれた八神にすり替えられた。従って、三女神を祭り八王子または八柱を名前に持つ神社は、本来の宗像神信仰社ではないことが明らかである。異なる名を持つ神社でも、三女神五男神がセットで祭られている場合は、牛頭天王の子神の八王子であった場合が殆どと考えられる。

（注2） オカミ神は京都市北部山中の貴船谷にある式内大社貴船神社の祭神であるので、一般に貴船神とも呼ばれ、全国の貴船神社が同社から勧請されたと考えられることが多い。しかし同社が記録に現れるのは弘仁九年（818）のことで、オカミ神はすでに『書紀』に現れていた。平城京時代朝廷の雨乞いまたは止雨の祭りはもっぱら吉野川上流の丹生川上神社に向けられていたが、平安京遷都後新京にも祈雨の祈願を行う社が必要となったため吉野からオカミ神を勧請したのが始まりである。『平成データ』で集計すると、全国の貴船系神社（キフネまたはキブネと読まれる名を持つ神社）は528社で、そのうち福岡県157社、大分県99社と、この二県で48%を占める。一方京都府内には貴船神社が他に存在しないので、ここが信仰発祥地とは考えにくい。オカミ神を祭る神社は全国に1327社あり、うち福岡県が272社、大分県が199社、愛媛県が151社で、この3県で全国の47%を占める。明らかに起源が福岡県から大分県の辺りにある神と考えられる。

（注3） 『調』は第2次大戦中の行政単位で集計されているが、市制が布かれている地域もかつて属していた郡中を含めて図示した。郡名とその範囲は『平成データ』で用いているものと異なる点があるが、同等の郡間で比較すると図2などで見た傾向とは大きく異ならない。

（注4） 『平成データ』には矢房神社の祭神をアマテラス、オオナムチ、タゴリと記すが、宝暦十年（1760）の置き札によると、アマテラスの名はなく田心姫命・大己貴命の順となっている[37]。タゴリが本来の主神であったと考えられる。

（注5） ムナカタの語源についての諸説のひとつのグループは、地理や地形からの説明である。
^{うなかつた}
この中には、海の方という海方から変わったという説、またかつて内海になっていた釣川沿いや、旧津屋崎町に干潟が^{むなかつた}発達していたことから来たという、「空潟」説などがある。

しかしこれらはどこにでもある地形で、ムナカタの地形の特徴をよく示しているとは思えない。「空潟」にしても、先史時代には日本全国、ことに日本海沿岸の各地に、砂州で仕切られた潟が各所に発達していた。これらは皆その後「空潟」の状態を経て、川を残して陸地化している。宗像市の両隣の古賀市と岡垣町にも、それぞれかつては宗像と同様深い入り江があり、さらに遠賀川流域にははるかに大きな潟があった。宗像を「空潟」の代表とする必然性はない。



それに「空潟」という言葉は、古代には使われたことがないようである。もともと「潟」とは、水が満ちていないところだからである。万葉集巻六にある山部赤人の有名な歌

「若の浦に 潮満ち来れば 潟^{あしべ}を無^{たず}み 葦邊をさして 鶴鳴き渡る」九一九

（岩波文庫版による）を見ればこのことは明らかであろう。

水のない状態を特に強調するときには「干潟」という言葉があるので、「空潟」などという言葉は不要なのである。潟には、芦などの草が生えているのが普通であるから、「空潟」という表現はあまり適切ではないからであろう。

「むなし」という言葉自体が、それほど古いものではないらしい。『日本語源大辞典』（小学館）によると、この語の初出は奈良時代の『続日本紀』であり、語源は「身無し」であるという説がきわめて有力である。組み合わせ語から転じて抽象化したものであるから、それほど古いことばではなく、古墳時代以前に遡るとされるムナカタの地名に、使われたはずがない。

水がないことを強調するならば水無潟というべきで、これがムナカタの語源であるという説もある。しかし、この言葉も使われた例はないようである。それに、このような三語以上を組み合わせた言葉が、上古から使われたとは考えられない。六月の古語の水無月も、もとは水な月、すなわち水の月であったものが後に当て字されたものとされる。

もうひとつのグループは、古文書に根拠を置くものである。これは、西海道風土記逸文の「宗像太神天より崎門山に降りましとき、青蕤玉を奥宮の表に置き、八尺蕤紫玉を中宮の表に置き、八咫鏡を邊宮の表に置き、この三表を以て神軀の形と成して、三宮に納め置きて即隠したてまつりき。よつて身形郡という。後人改めて宗像という。」（以下訓注は『宗像神社史』[38]などによる）による身形説と、西海道風土記逸文の他の一伝にある「天神の子四柱あり。兄三柱神弟大海命に教えて曰く、汝命は吾等三柱の御身の像と為りて此の地に居るべし。（中略）故に号して身像郡という。」による身像説とがある。しかしこれらも、どの神にでもあり得る話で、宗像に固有の地名の語源になるとは思えない。上記逸文が奈良時代の風土記成立当時の文章に間違いがないとしても、一般に風土記の地名・神名等の縁起はこじつけと考えられるものが多く、多くは語源として信用できない。

（注6）タゴリの意味については、『宗像神社史』は古事記が多紀理毘賣と表記するのを本来の読み方とし、タコリはタギリ（滾り）で、「水の逆巻き湧きあがる様をのべたもの」として、激しい海の波が「滾る」さまとする。しかし、この説明には問題がある。

古語ではタギリはタギツ（激つ）から出た言葉であり、タギツと同じ意味である。同じ意味を持つ神名が、並んで挙げられているのは不自然である。そして「たぎつ」は、万葉集に13の用例が挙げられているが、そのすべてが吉野川などの川の瀬で水がたぎる様を詠んだもので、海の波のさまに使われたことはない。「たぎる」という語は、平安時代以降の文献に始めて現れ（『角川古語大辞典』）、「湯が滾る」というように転化した意味で用いられる。上古には「波が滾る」という用例はない。

『書紀』では、田心はおおむねタコリと清音の読みが付されている写本が多く、特に『日本書紀私記』のある写本には万葉仮名で「多去利」と記されているという（『宗像神社史』）。この表記は、清音でしか読めないことが明らかである。



北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析
—宗像神信仰の研究（2）—

岩波文庫版『書紀』[8]も、音をタコリと記す。「^{たぎ}滾り」には清音の形はないので、仮にタコリがタキリの交代形であるという説（岩波版『書紀』の注）が成り立つとしても、「タギリ」にはつながりそうもない。

一方正木喜三郎[39]は、神代紀第六段の第三の一書に田霧と書かれていることをよりどころに、これを「多霧」の意味とし、対馬暖流が暖かい水蒸気をあげ、寒い中国からの季節風にあって、日本海特有の霧を発生させる様の神格化という説を唱えた。しかし古語辞典にある限りでは、「た」が漢語の「多」の意味で使われることはない。漢語を重ねた造語が行われるのは、後世のことである。この点からこの説には無理がある。タゴリは全国の神社で少なくとも15通りの表記で記されているが、多霧と表記した例は全くない。田霧も少なく、ほとんどが宗像と関わりの少ない遠方の地域にある。これは『書紀』の上記の一書の表記にならったものと思われる。福岡県には全くなく、九州では大分県に一社あるのみである。

またさらに、沖ノ島周辺は決して霧の発生が多い海域ではない。『海洋気象講座』[40]によれば、日本海北部は年間霧日数が北海道南東岸（53～91日）や本州北部太平洋岸（22～39日）に続き13～41日と多いが、日本海南部は10～15日以下で、日本列島をめぐる海域の中ではもっとも霧が少ない。理科年表（岩波書店）で2000年まで30年間の年間霧日数の統計をみると、沖ノ島に近い厳原（対馬）では16日ときわめて少ない。私も数回沖ノ島に渡っているが、霧に遭ったことはない。漁師や釣り人からもそのような話は聞いたことはない。沖ノ島を遠望しても、特にそのような印象を受けたことはない。

以上の諸説は、『古事記』がタゴリを「^{たぎりびめ}多紀理毘売」と表記していることに影響されているものであろうが、神代紀では本文と第一および第二の一書が田心姫である。第三の一書のみが田霧姫と表記していて、数から見ても三対一である。『古事記』は神代紀を見て書かれた可能性が否定できず（次報で詳述予定）、タゴリ（またはタコリ）が本来の神名であった可能性が高い。

（注7）『付録』の続編『筑前国続風土記拾遺』[41]の著者。同書にも津屋崎の浪折神社の主祭神に貴布祢明神を記すが、一方で上の岳（現在の宗像市田野向田野）にあった浪折神社の筆頭祭神を瀬織津姫命としている。この神社は現在田野石川の依嶽神社の境内末社となっている。

（注8）天元二年(979)の太政官符で宗像に大宮司を置くことが許可され、以降宗像大宮司家が天正一四年(1586)第79代氏貞の死まで続く。



参考文献

- [1] 矢田 浩, 『宗像神を祭る神社の全国分布とその解析 —宗像神信仰の研究（1）—』, むなかた電子博物館紀要, 7号, pp.202-237, 2016.
http://www.d-munahaku.com/culture/kiyou/files/2015/09_kiyo2015.pdf
- [2] 神社本庁, 『全国神社祭祀祭礼総合調査 平成「祭」データ』, 1995.
- [3] 石田諭司, <http://www.tt.rim.or.jp/~ishato/index.html>.
- [4] 宗像神社, 『宗像神社史料第二輯 宗像三神奉齋神社調』, 宗像神社, 1944.
- [5] 伊東尾四郎, 『宗像郡誌』, 臨川書店, 1986（復刻）.
- [6] 遠賀郡教育会『遠賀郡誌』, 臨川書店, 1986（復刻）.
- [7] 川添昭二他校訂, 加藤一純・鷹取周成, 『筑前国続風土記付録』（上）（下）, 文献出版, 1977-1978.
- [8] 坂本太郎他, 『日本書紀（一）』, 岩波文庫, 2004.
- [9] 中川雅央, <http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/sensei/mnaka/ut/rtable.html>
- [10] 藤尾慎一郎, 『国立歴史民俗博物館研究報告』, 21集. 1989.
- [11] 宗像市教育委員会, 『概報 田熊石畑遺跡』. 2009, 『国史跡 田熊石畑遺跡』, 2014.
- [12] 『峰町史』. P.1473, 1993.
- [13] 田平町教育委員会. 『里田原遺跡(田平町文化財調査報告書第9集)』
- [14] 正林 護, 『日本の古代遺跡 42 長崎』, 保育社, p.167, 1989.
- [15] 伊藤常足, 『太宰管内志下』. 文献出版, p.225. 1989.
- [16] 三浦 譲, 『全国神社名鑑』, 全国神社名鑑刊行会, 1977.
- [17] 岐宿町, 『岐宿町郷土誌』, p.204. 2001.
- [18] 神道大系編纂会編, 『神道大系 神社編 総記（上）』, 神道大系編纂会, 1986.
- [19] 高田右近, 『豊前国志』, 1865.
- [20] 神道大系編纂会編, 『神道大系 神社編 44』, 神道大系編纂会, 1982.
- [21] 栗畑光博, 『火山噴火が狩猟採集社会に与えた影響』九州大学学位論文, 2014.
- [22] 李 相均, 『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』, vol.12, pp.113-168, 1994.
- [23] 『芦屋町史』, 芦屋町, 1991.
- [24] 渡辺 誠, 『目からウロコの縄文文化』、ブックショップマイタウン、p.56, 2008.
- [25] 芦屋町教育委員会, 『山鹿貝塚』, 1972
- [26] 春成秀爾, 『古代の装い』, 講談社, p.64, 1997.
- [27] 渡辺正気, 『日本の古代遺跡 34 福岡』, 保育社, p.144, 1987.
- [28] 岡崎 敬, 『宗像沖ノ島』, 宗像大社復興期成会, 1949.
- [29] 任 東権, 『玄界灘の島々』, 小学館, p.105, 1990.
- [30] 岡谷公二, 『原始の神社を求めて』, 平凡社新書, 2009.
- [31] 日本歴史大系第41巻『福岡県の地名』, 平凡社, p.86, 2004.
- [32] 金関丈夫, 『発掘から推理する』, 岩波現代文庫. p.154, 2006.
- [33] 石原道博, 『魏志倭人伝他三編』, 岩波文庫, 2006.
- [34] 宗像市教育委員会, 『桜京古墳』, 2007.
- [35] 『津屋崎町史 資料編上』, 津屋崎町, p.412, 1996.



北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析
—宗像神信仰の研究（2）—

- [36] 神道大系編纂会, 『神道大系 神社編 49 宗像』, 神道大系編纂会, pp. 6-21, 1979.
- [37] 宗像市史 史料第 3 巻』, p. 520, 1999.
- [38] 宗像神社復興期成会, 『宗像神社史上』, 宗像神社復興期成会, 1961.
- [39] 正木喜三郎, 『宗像の歴史と伝承』, 岩田書院, 2004.
- [40] 福地章, 『海洋気象講座』, 成山堂書店, 1975.
- [41] 広渡正利他校訂, 青柳種信. 『筑前国続風土記拾遺（中）』, 1993.